〔研究ノート〕

スタンダール伝

（その二）

金子　守

ドイツの評論家リヒャルト・キュナウが丹念に原文と比較研究した結果，全体の四分の三は剽窃であり，それも審美的な部分に集中していると看做している。スタンダールはハイドンの自由で陽気な音楽が好きではあっても，ハイドンを語るほどにはその音楽に精通していなかったようである。それゆえに自己の音楽体験の不足や知識の不足を誰か専門家から頂載することになったのであろう。1833年にいたって彼自身がイタリア人の著作に拠ったことを認めている。そして，1841年にはその原因を説明している。ゲラールの『剽窃文学の真相』によると，初めスタンダールは翻訳する積りでいたが，出版者ディドがイタリアものの翻訳と広告しては読者がいないだろうと，反対したので匿名にしたと言われている。一方，スタンダールは匿名は剽窃となるのであろうかと告白しているという。しかし，審判者リヒャルト自身は綿密な実証の結果，それでもスタンダールに優越を認めている。

この問題に就いてのわれわれの見解はロマン・ロランが『スタンダールと音楽』で，《……以来，スタンダールはその栄ある航路のなかに今なお犠牲者を引きずっている以上，充分に償いをしたのである。》と，史的価値判断をしているがまったくその通りであろう。天才の飛躍は著しいものであり，彼自身しばしばその成果に気がつかない無意識の裸になされる。そして，その飛躍には有形無形の犠牲者を作り出している場合が多い。接木が自己の能

力を失うことなく一本だちに成長するとき，実る果実は前のうまさどころではない。接木は危険を冒す成功しなければ自らが第一の犠牲者となることを本能で悟っている。周知の如くスタンダール自身尊敬するシェークスピア，モリエールも例外ではなかった。

スタンダールは今度のミラノへ帰った際にブレーメ司祭と面識を持った。噂によると司教となる機会を拒絶し，閣下の階位を有すると言われている彼はスタンダールの『パルムの僧院』のなかでいっそう品位を有し，魅力あふれるファブリス像となって見える。彼はカザ・ローマに居住し，毎日，夕方になるとスカラ座でもそうしているように邸に当地の貴族や著名な外国人たちを迎える習慣を持っていた。スカラ座は奇妙な場所である。モスカ伯の驚きはスタンダールのそれでもある。人々はそこで逢引をし談笑し遊び食事を取り，そして，音楽を聞き，観劇すると言った具合である。スタンダールが『エヂンバラ』誌の存在を知り，さらに，ロンバルディの幾人かの浪漫主義運動の指導的役割を果していた自由党員と交際を持ったのもここの社交界であったと言われている。

此の16年10月から11月にかけて，彼は冷たくて高慢ぶっているあるイギリス人に会っていた。この若者はスタール夫人を通じてブレーメ閣下に紹介されたとのことであった。しかし，ナポレオンの部下であったスタンダールの面前では人を喰った冷淡な態度は影をひそめる。そして，熱心に彼からナポレオンのすべてを聞く。このような動機で彼と知人となったスタンダールはクローゼにこの若者のことを以下の如く知らせている。

《美しい魅惑的な若者で顔附は18才，あるいは，28才かもしれない。天使の肖像の如きとても優しい態度をしている。ロズラースの原型，否，むしろお喋り屋のロブラースと比較したら問題にならない程いい男だ。ところがなんと彼は現代の詩人バイロン卿その人でした。》

バイロンは友のホッブスと連れだってミラノに滞在していたのである。ホッブスとスタンダールとの会話にバイロンは関心を惹かれたものと思われて

いる。スタンダールは偉大な皇帝の側近者の如くその秘書官の如く振舞って両人を面白がらせたと言う。ホッブスはスタンダールが語る条理に外れたエピソードを急ぎ書きとめたと言われる。コロンはバイロンとスタンダールの邂逅に就いては二人のあいだに親密な共感はなかったと，はっきり注意していた。事実，両人の芸術に対する概念，及び，人間やその生活の受け取り方はまったく逆な両極であった。それでも，両者の文通から理解されるのであるが，彼等は互に偉大な人として尊敬しあったのである。此の16年代のスタンダールの生活に今一つの注目すべきは上述の『エヂンバラ』誌の読者となっていることであろう。そして，彼自身，この雑誌を知ったことは私の精神史に執って偉大な時期となったと回想している。14年前にこの雑誌は創刊されたものであるが，以後，スタンダールは数年にわたって全巻揃えようと努力している。眼前に見知らぬ水平線とも言うべきイギリス文学の眺望が開けてくる。この雑誌の項目の多くは浪曼主義に就いてのかなり確かな見解が見出され，その意見は一群の神秘主義，及び，ドイツ哲学の流行が支柱となって成立している。その目的とするところは人間本性の追求にあったと言う。

それゆえ，スタンダールが絶えず自己をも含めて人間性の認識に関心を持ち続けていたので，このような諜知から『エヂンバラ』誌に深く共鳴を覚えたのであろう。さらに彼がイデオローグ，及び，諸作家の作品より自己流の方法論にもとづいて蓄積した諸原理がそこに明確に確認された筈である。1816年，17年の２ヵ年も相変らずかのメラニーにうちあけていた仕事を続けている。悲喜劇に就いての研究覚書がそれであるが，彼にはいつの日かモリエールと並び称せられる夢が絶ち切れない。しかしながら，スタンダールの性格の烈しさは社会と個人の歪みなる真空地帯に発生する笑いとは程遠いものである。一方，彼はロシヤ遠征のときも携帯していてその一部をモスコー退却の際紛失した例の『イタリア絵画史』の出版に奔走していた。ともかく『イタリア絵画史』は部分的完成を見，パリのデイドで印刷が始まっていた。スタンダールはこの絵画史の叙述にこれまで蓄積した人間個々の気質，諸政府，及び，

風土に関する彼の諸理論を展開している。読んで見ると一歴史物語の印象を覚えるのは彼の理論の結果なのである。なお，今日，この本の献辞に1817年の初版のものと1854年のミシェル・レヴィ版に現われた二通があるが今こゝで私はこの16年，17年代のスタンダールに焦点を合せてみるために第一の献辞を問題にしてみたいと思う。

《現存する最も偉大なる君主に，心は自由であられたに違いない正義の人に，たとえ政治上ではこれこそ今日の唯一の統治手段であることを知られなかったとしても。》

これは第一版にあって若干の冊に附されたもので今日，グルノーブルの手記のなかの一冊に埋もれてスタンダールの自記筆で発見することができる。これは一瞥すると，ナポレオンに捧げたのではないかと推察されやすいが皇帝失墜直後という年代を考えると確かに疑問になる。また，第二の献辞には端的にナポレオンの名が明記されているので，推理して第一の献辞も皇帝に宛てられたものと看做されたが，むしろ，ロシヤのアレクサンドル大帝に捧げたものじゃないかと見るポール・アルブレの説が今日では妥当とされ，その当時，アレクサンドル大帝はパリに滞在していて，スタンダールによるとそれとは悟っておられない自由思想，博愛的言動，大様な寄贈などで大いにフランス人に好評を拍していた。言うまでもなくナポレオンの失墜はスタンダールの失職を招き，何かで食べてゆく必要に迫まられていた。ルイ・クローゼ宛の手紙に読めるのであるがロシヤで教師の職を求めていたので，その点も加味されてこのような献辞を書いたものらしい。と，推定されている。こゝにわれわれが読みとりうるのは彼の自由主義思想が本格的な色彩に染り始めたことである。スタンダールが画いたそうした色彩の絵が『イタリヤ絵画史』である。

1816年の9月以降ルイ・クローゼとスタンダールとのあいだにこの本の出版のために頻繁に往復書簡が取りかわされている。スタンダールから送られてくる原稿を整理し、出版するのがクローゼの役割であった。フランスとイ

タリアに離れているためにプランシイで一諸に仕事をしていたようには両者の意志の疎通もスムーズにゆかない。それに12月の末にクローゼは彼の従妹ペイアン嬢と結婚していた。従って，スタンダールは少々は彼女と面識はあったのであろうが，この新妻にすがる結果となった。事実，手紙に読まれるのである。すなわち，スタンダールは友の心の少しくらいは私のために残して下さい。と，彼女に哀願している。しかしながら，こうした彼の哀願にも拘らず互にそれまで感じあっていたあの絶体的な友情もクローゼの結婚によって下降する。スタンダールはそんなクローゼを観察して口惜しそうに述べている。

《結婚，殊に田舎では男をびっくりする程老いこむ。彼の精神は鈍くなるに決っているのが定石である。》

スタンダールの方はローマを離れてナポリに来ていたが，約一ヵ月，そこに滞在して音楽会に行ったりしていたが，17年3月4日ミラノへ戻っている。そこに殆んど落ちつかず4月にはフランスに向けて旅だっていた。フランスでは妹ポリーヌの事情と『イタリア絵画史』の出版が彼を迎える。義弟のフランソワがポリーヌに借財を残して16年の12月に亡くなっていたのである。彼の魂の遍歴の被告解者であった妹ポリーヌ，ダリュ伯夫人の死後，すべてを打ち明けることのできる唯一の女性であるポリーヌと，パリかミラノで妹の僅かな年金と自分の年金を集めて暮らそうと願ったらしい。結婚後，官職に就いていたクローゼのオーブにある家でしばし休んだ後，彼は5月のなかばにパリへ向っている。ファヴァル広場のイタリア・ホテルに宿泊して『イタリア絵画史』の最後の校正のためにデイド出版社に通っている。また，その仕事のあいまに『1817年ローマ，ナポリ，フロレンス』の出版に際して最も条件のいゝ，要するに割安の印刷業者を捜していたが，6月17日にエグロン書店と契約を結んでいる。7月20日に彼の手には『イタリア絵画史』の第一号があった。同時に彼は『ローマ，ナポリ，フロレンス』の決定稿を作成している。8月1日，彼はロンドンへゆくためパリを出発する。その翌日図書

新聞は『イタリア絵画史』を告知している。告知には二巻とあるが実際は三巻よりなるものであった。続くべき本が発行されたのは現代のこと，すなわち，1932年ディヴァン版のなかに遺稿を整理して刊行されたのがそれである。スタンダールのこの絵画論は現代のわれわれが読む絵画史，すなわち，純造型問題をテーマとして追求するものではないがために，また，そのエスチックがこの絵画論に詳しく説明され，後年，彼の小説のエステチックを形成する意見でもあったがゆえに，少しばかり解説を試みると同時にスタンダールの絵画への憧憬が生来のものであることを注目しておきたいと思う。彼のエステチックの一要素である時代性のために幼ない頃から絵筆に親しんでいる。18世紀に絵画は教養を身につけたいと願う人々には必須のレッスンとなり競って彩管を手にする風潮があった。ラ・トウールの大作に例のポンパドウール夫人が絵道具に囲まれて大きな画帖を才気溢れる様子で開いている肖像がある。美術は貴族のサロンからやがて抜けだし市民の教養の対象となる。このような時代に応じて，アベ・デュボスの芸術論が世にでる。続いて，ディドロの『サロン』が美術批評をリードする。さて，スタンダールの幼少時に戻ろう。子供は母親がデッサンする傍らにいてカンバスを覗いたことであろう。彼の母はデッサンが上手であったと言われている。彼がアンリ・ブリュラールに追憶させているところによると，絵を美しいと感じたのは12才頃であったと言う。それで中央学校へ入学してからも絵の稽古は続き賞を貰っている。周知の如く秀才として理工科学校の入学試験を受ける資格を与えられ，パリに出てきたにも抱らず，スタンダール少年が入学したのは美術学校であった。学校はルーヴル宮の一部にあって，そこで，スタンダールはダヴィッドの門人であるルニョールの教室生となったのである。しかし，国許に知れたのであろう。それで病気になったとき前述した如くダリュ家に引き取られた。美術学校に入った動機の一つに彼がアベ・デュボスの『詩，及び，絵画に就いての諸考察』を読み深く感銘していた事実をあげることができよう。スタンダールは15才であったがエルヴェシウスから人間行動の基礎概念（人

間の行為は情熱に一切基ずいている。情熱の恋愛は16才の小娘を利口者とすると言うのである。)を学んだ如く，このアベ・デュボスの書物から芸術一般の基礎概念を学び得た筈である。アベ・デュボスの主張は次の如くである。絵の本質は人間感情の表現であると看做して画家は燃ゆるが如き気質が必要であり，さらに，芸術の成立に就いては気候風土の影響を加味し，その相異は個人の気質の相異ともなると看做し，画家はこれらの気質を識別しなければならない。また，芸術の発生を説明するにあたってはその民族，及び，社会状態を研究すべきであるとしている。この本のスタンダールへの影響は『イタリア絵画史』の基本的方法論に短絡的にあらわれている。また，他の本の影響ではヴィケルマンの著作が挙げられている。スタンダール自身が読んでいないと否定していたことが逆に彼が読んだことの証拠であると考えられている。『イタリア絵画史』の構成にヴィケルマンの『古代美術史』の影響が歴然としていると言われる。アルブレの如く異議を唱える研究者があるにせよ，スタンダールと言う彼が始めてこの本で使用した筆名はまさにヴィケルマンの生地シュテンドルから採用されたことは事実であろう。ヴィケルマンはその著作で古代ギリシャ芸術の発生，変化をその国土と政治形態から叙述し，自由のみが芸術を完成すると論じたのである。そこでスタンダールは第一回のアルプス越えを始めとしてナポレオン叙事詩をすべて体験して，自分の属する時代の意義を直観し，時勢の要求する美の理想を見抜けたのである。彼は執筆に際してヴァサリ，ランツイ，ピニヨチなどのイタリア美術書を直接参考にしている。殊に，ランツイの『イタリア絵画史』を要約して取り入れている。

スタンダールの『イタリア絵画史』は要するにレオナルドとミケランジェロの二項目に見るべき価値がある。彼の本が出版されてから20年後に当時の最大の画家であり，絵画評論家でもあったドラクロワは1837年の『両世界評論』の8月号でこの本のミケランジェロの『最後の審判』に就いて次の如く述べている。

《読者諸君，この「最後の審判」に就いて最も素晴らしい叙述を知りたいなら，スタンダールの『イタリア絵画史』を紐とき給え，私がこゝで述べているどころの比ではない。これこそ，天才的著作である。私の読んだものゝなかでこれほど詩的なこれほど驚歎すべきものはない。……》

8月3日にスタンダールはロンドンに着いている。彼のイギリス旅行の動機は『ハイドンの生涯』が英訳されたことにあったと見られている。彼はパリを出発するに際して『イタリア絵画史』の寄贈者名簿を友の一人ルイ・ド・バラールに渡している。バラールは忠実に頼みを実行した。このようにして，アンジュ・サン・オノレ街に住むデスチュト・ド・トラシイにもその一冊が届けられた。9月4日はスタンダールに執ってその生涯で誇るにたる最良の一日であった。例の贈呈に対する返礼のため，彼が同時代の最高の哲学者として尊敬していたトランシイ伯はスタンダールの宿泊するホテルに彼を訪問したからである。多分，話は尽きなかったであろう。トラシイ伯はかっての上司の孫に会っていることになる。グルノーブルのこと，中央学校のこと，とりわけ，スタンダールの祖父のことが話題になったであろう。二日後，彼は答礼のため伯を訪ねている。その折，トラシイ伯は彼に『精神の規律性に関する注釈』を贈っている。両人の交際はパリにスタンダールが滞在している限り続くことになる。

『イタリア絵画史』，及び，『ローマ，ナポリ，フロレンス』の完成は彼の文体の完成でもあった。後日，彼が語った言葉であるがこゝにそれを引用すべきであろう。

《輝やかしい句が精神を誤った思想でしか導かないなら悪文のなかに展開されている真実をむしろ好む。》

この意味は彼に執っては最良の語とは最も的確に思想を伝えるものでなければならなかった。アンドレ・ジッドは『贋金作りの日記』のなかでスタンダールの文体に就いて次の如く語っている。

《スタンダールにあっては一つの句が次にくる句を呼ぶとか，または，そ

の前の句から生れているとか言うことは決してない。各々の句はそのあらわしている事実，または思想と垂直な位置にある。》

スタンダールの文体に就いてはバルザックの批難も知られているが，しかし，スタンダールに執ってシャトウブリアンの文体がある種の余情の戦慄を伝えているとは解せないことであった。また，あれほど私淑していたルソーに対してすら彼はその文体の誇張を批難している。

10月から11月にかけてチュエランにいる妹ポリーヌの傍らにスタンダールはいた。妹の遺産相続が裁判沙汰になっていたのを助言するためであった。裁判が一段落すると兄妹は始めて一緒にミラノへ旅立ったのである。

11月27日にミラノへ到着した彼はブエロンチイ館に旅装を解き，妹のためには別室を借りている。そして，夫を失った彼女の気晴らしになるようにと気心の知れた2，3人の友人を妹に紹介している。それから1ヶ月30フランでスカラ座の桟敷を妹のために買っている。このようにポリーヌは異国で兄スタンダールによれば歓楽の都で4ヶ月を暮したのである。どれほどポリーヌは悲しみを忘れることができたであろうか。一方，スタンダールの日課は午前中は読書をしたり，仕事をしたりしてすごし，午後は4後頃まで散索を楽しみ，5時に夕食を取り，それから，2，3の訪問をすることからなりたっている。

スタンダールがメラニーやアンヂエラを愛するとき，自分の恋人にたゞ女性であることを要求する以上に自分が理想とする女性像に相応する知と魂をそなえていなければ満足できなかった。だから彼は妹ポリーヌを始めとし，メラニーやアンヂエラにエルヴェシウスなどの講義を試みたのであり，また，ポリーヌに宛てた手紙に見られた如く，メラニーの乳房にローラン夫人の魂が存在することが愛の持続の条件となる。彼が蜃気楼で満足しているあいだ，現実では逆説めくが女を感じているあいだは彼女に対して感覚に堪能し，批評を避けているが彼女に倦むとき，相手の魂の発見とみる行為の一つ一つが苛酷な非難の餌食となる。かくて，彼はエルヴェシウスを理解しなかったメ

ラニーを馬鹿呼ばわりしたのである。スタンダールは多分に小説的啓示からであったにせよ。男が女を愛するという宿命を知って以来，崇高な女性を愛し，そのひとから愛されること以外のどんな欲望も殆んど人生に抱かなかったとは例のメリメの証言である彼はいつも恋していたを引用するまでもない。しだしば人生辛苦の逃避の場として美術，文学，演劇を愛好するのは愛情の代償行為の感が深い。それゆえ，スタンダールの口癖であるが幸福狩，それにしても獲物は少なすぎたが捉えたとき，アポロの天馬ならぬエロスが曙を告げるとき，スタンダールは思う。遂に〈私は崇高な魂をもった女を愛しもし，愛されてもいる。〉と。

1818年，ミラノで迎える曙こそスタンダールが自分の理想通り信じても最後まで裏切られることのない魂からでる光であったのであるが，その光は殆んど彼の魂に達することはなかった。たまに光が届くことがあってもそれは曇の空から洩れる薄光でしかなかった。この光こそ，周知の如くメチルドである。スタンダールがこの婦人の名のみ実名のまゝその小説などで用いている事実はいかに彼が彼女を深く愛していたかをつぶさに示していると思う。彼女はミラノの上流階級の出身であった。祖父ジャン・バチスタ・ヴィスコンチィには二人の男子があった。その一人のカルロとマルリアニの結婚はメチルドに誕生日を与える。

1807年に17才で彼女はポロニュのゴラで生れたジャン・デンボウスキー副司令官と結婚していた。夫は彼女より20才も年上であった。ポーランド連隊に入隊した後，ナポレオンに忠誠を誓ってイタリア連隊に移ったと見られる。結婚して一年後イスパニヤに派遣されている。彼はそこで出世する機会に得てイスパニヤから1810年，一旅団の司令官に昇進してイタリアへ帰っている。1814年5月に軍職に復帰してミラノ地区司令官となった。けれども1815年以後は新軍隊を組織するにも余り熱意を示さずして引退し1823年に亡くなっている。生前は粋な男という評判さえ得ていたゞけにさぞ執念深い性格の持主でもあったであろう。1808年以来当世第一の名声を持ち愛国の詩人として知

られるフォスコロが妻を尋ねる都度，彼は猜疑に悩み嫉妬に苦しんだであろう。一方，フォスコロは18世紀後半のアルフィエリの思想を継承している。両者に共通している目的は，祖国の独立であり，外国支配の駆逐こそ当面の目標としていたことである。それゆえ，外国支配を極端に敵視していたのでフォスコロの感情の発露は抵抗文学を形成し，その思想は祖国解放のパンフレットであった。アルフィエリ作『ミソガルロ』にはフランスへの反抗が強く示されていると言われている。それはイタリアの国民的感情の表現であったが，まだ狭い範囲に限られたもので広く各階層に拡っていた思想ではなかったのである。このアルフィエリに続くフォスコロは彼の生きた時代の影響を受けて先駆者とは対照的にフランス軍の侵入が祖国解放の導火線となると看做してこれを大いに歓迎し，一方ではイタリアの他力本願の無気力を悲しみ歎くのである。このような思想を持った詩人フォスコロとミラノ社交界の花形であるメチルドとの邂逅は，当然，彼の思想的背景を考慮せざるを得ない。元来，デンボウスキー自身がナポレオンに忠誠を誓った軍人であったことは上述した通りである。フォスコロはメチルドの従姉であり，友であるビナミの愛人であった。他方，ダンディイな軍人と評されたデンボウスキーではあったが，反面，妻に野性的な振舞に及んだらしい。そうした夫の乱暴な行為が勘に触れたためか，それとも夫の嫉妬のためか，1814年にはメチルドは彼の許から逃れている。そこで，夫のデンボウスキーは妻に彼女がたいへん可愛がっている末っ子を渡さないと脅かすので，彼女はその子供と一緒に二度もスイスに隠れ家を捜さなければならなかったと言われている。当時，奇しくもフォスコロもスイスに隠棲していたので，ミラノ社交界ではメチルドが彼と合流するために出奔したのであろうという噂しきりであった。

後年，スタンダールもこの噂を信じたようである。けれども，此の時期の両者の往復書簡から判断すると，清い友情の交換しか見られないとも解釈されているのであるが，だが，この推測に就いては別の見解もある。アルマン・カラツオの研究によると，スタンダールがメチルドを識る10年前フォスコ

ロはミラノ社交界で彼女と親しみ多分メチルドに恋したらしい。……夫との不和が原因なのか，この浮き者のフォスコロに対する嫉妬のためか，それとも，ロマンチックな彼の最後の手紙に感動したのか，1809年頃にメチルドは自殺を思ったらしいと言われる。そこで，フォスコロは彼女の自殺を怖れて一生懸命思いとどまらせようとした。それから，フォスコロがメチルドに与えた書簡に〈宿命的な一夕〉という文字が使用されていることを明らかにしている。1816年の末に夫への抵抗に限度を悟ったのか彼女はミラノへ帰らざるを得なかった。ミラノ社交界の掟ても気になったのであろうか。。夫の許に帰ってからのメチルドは生来の浪曼的傾向と，夫の獣的な愛憎から解放されるために理想の実現に励み，祖国解放のために気高く戦う若人を秘かに助ける気丈な女性に成長していた。こうしたメチルドの精神にフォスコロの思想が反映していると思う。それゆえ，彼と同じく革命気運の導入者としてフランス人に好意を示したと思われている。周知の通りスタンダールがメチルドと始めて会うのは1818年の当初であるが，此の年のイタリアの政治はどんな状況にあったであろうか。両人の邂逅にはかゝるイタリア史の認識なくしては正確にその邂逅を把握できない面がある。ナポレオンの失墜に伴う1815年ウイン列国会議の結果はイタリアにも再び旧状態が復興され，フランス大革命，及び，ナポレオン体制によって導入された新機運は後退の止むなきに至ったのである。従って，ナポレオンが建国した新共和国や新王国の跡には以前の旧君主（ブルボン系）が再び君臨する。例外としてナポリ王国や北イタリアのパルマなどの小国にナポレオン系の君主が数えられるのみとなった。それに戦後メッテルニッヒを宰相とし，ヨーロッパ諸国の指導的地位を占めたオーストラリアはミラノ，ヴェネツィアなどを領して北イタリア全体を雄視していたので，イタリア独立運動の目的はこのオーストリア勢力打倒に集中していた。すなわち，先ず外国勢力の国外追放にあった。そして，この運動を一部の例えばファブリスの父の如きイタリア貴族と結んで，メッテルニッヒは弾圧する機会を狙っていたのである。

スタンダールはブレメ師を介して浪曼主義という隠れ蓑を纏って祖国解放の理想に熱中する青年との交際が深かった。彼自身『メチルド物語』に述べているのであるが,

《……まあこの事件（スタンダールのメチルドに対する恋のこと）に就いては目を覚まし給え。あの男より僕の方がずっと君を愛しているよ。なにしろわれわれは政治上の考えだって同じなんだからね。》

とあるように，イタリアの自由，解放，独立運動の良き理解者として1816年当時，自他ともに許す自由思想を宣言していたのである。此の頃，彼は年令も33才になり，かって1800年当時の17才の少年ではなかった。10有余年の年月は彼をかっての上官ダリュ伯をして見違えるほど賢くしていたのである。すでに指適しておいた如くあの当時のスタンダールに執ってはナポレオンのイタリア侵入の意義は認識できなかったのである。アンリ・ブリュラールに回想せしめているようにルソーへの憧憬とか，自分自身のいわゆる二つの童貞のことしか念頭になかったのである。しかし，10有余年を径た現在の彼はかっての自分たちフランス軍のイタリア侵入の意義をはっきりと認識していた。

すなわち，1814年から16年に創作したと思われる『イタリア絵画史』の第一巻の終行には次の文章が読まれる。

《……私はピエモンテの地を君主制の例としてたいへん面白いと思った。誰もがイタリアに一歩をしるすと，直ぐこの例を目撃する。すなわち，私が嘘を言ったかどうか分るのです。そして，この例が今日，われわれが目撃することができる唯一のものであるのを見るならば誰もが我が名誉ある大革命に感謝する。》

このように彼はイタリアの政治状勢に就いての正しい認識を示す。さらに次の句が同書にある。

《今日，これらの国はその祖国愛と両議院とによって征圧し難いものとなった。》

こうした思想を同書の完成と共に自分のものとして身につけていったと思う。此の時期，スタンダールは最も左によった思想に我を置いたと，私は解釈している。また，約10年後にスタンダールはかゝる思想の第二のピークに達する。それゆえ，自由主義思想に身をおくスタンダールとメチルドは会うことになる。それで，多分，彼女は同志としての親頼感から彼との交遊を深めたにちがいない。スタンダールはヴイスマラにメチルドに紹介されたと見られている。メチルドの晩餐にもよく招かれるミラノ生れの弁護士であるヴイスマラはミラノ上流社会との交際が深かった。1818年当初，スタンダールはこの男と親しい間柄にあったのである。

また，一説にはこのヴイスマラでなくイタリア浪曼派の指導者であるエルメス・ヴイスコンチではないかとも言われている。なぜならスタンダールは例のブレメ師を介して彼を始めシルヴィオ・ペリコ，ヂイ・ベルクット，ピ・ボルシェリ，コンファロニエリなどに会っていたのである。彼等は誰もが『エヂンバラ』誌の愛読者であり，スタール夫人やシュレーゲルを読んで啓発され，現代文学は現代のイタリアの表現であると看做して古代の模倣であってはならないと考えていた。しかし，このイタリア浪曼主義が祖国を思考するとき自然政治的傾向に走らざるを得なかった。それゆえ，文学的であることは独立解放を願う青年知識層の政治的信念の間接的表現となって現われたのである。

1816年シルヴィオ・ペリコが機関新聞『コンチリアトーレ』の発刊計画に就いて友人に書き送っている書簡が彼等の目的を告げている。表面上は演劇問題を取り扱うが、真の目的は少なくとも文学的理論の形式をとった知識の普及であり，社会的観念の宣伝にあると述べていると言われているのであるが，イタリアは長年にわたる支配国家の愚民政策によってフランスが18世紀に経験したような啓蒙運動が漸やく18世紀末から19世紀にかけて起ってきたのであり，国民の大部分を占める農民属はまったく無知であった。従って，知識層には独立運動の前の役割が同時に要求されることをこのシルヴィオ・ペ

リコー派の連中が悟り，文学に名を騙って国家概念の意識に目覚めさせることを狙ったのである。こゝにイタリア浪曼主義が教義として文学を，信念として政治をモットーとしたのである。

後年，自分の墓にフランス人の代りにミラノ人と断っておくなどと言うほどにイタリア生活に親しんだスタンダールは自分もかゝる浪曼主義に関する二つのパンフレット，すなわち，『ロマンチシスムとは何かとロンドニオ氏は言う』，と，『イタリア語の危機』を1818年２月末から３月初めにかけて書いている。その他，彼は様々のパンフレットを書く計画を意図したがみな実行されず，むしろ，彼は『コンチリアトーレ』の理論家エルメス・ヴィスコンチの説を熱心に読みメモをとっていたのである。ともあれスタンダールは1818年の３月４日，早くもメチルドの傷心な様子に惹きつけられている。叶わぬ愛の発端である。当時，メチルドは自由党員である兄弟と一諸にガリーヌに居住していた。スタンダールの目に映じた彼女の人間像は現実のメチルドの容姿とかなりの相異が認められるようである。しかし，彼女はイタリア女性のなかでもっとも魅惑的であり，それでいて反面犯し難い気品を示している美女であった。つまり，レオナルド・ダ・ビンチの画いたエロディアッドそのものであった。上述のフォスコロは当時の美女鑑定家と言われたシジスモンド・トレキから次の如き手紙を貰っている。

《デンボウスキー夫人は優雅だし，言うこともしっかりしているが，目鼻立ちは骨張っていて優しさに乏しい。》

事実，1825年にメチルドは持病の結核で亡くなっているからアンヂェラとは正反対に華奢な身体つきであったであろう。

メチルドの想いに後髪を引かれながら彼は妹ポリーヌの訴訟事件のため，妹と共に故郷グルノーブルへ帰っている。彼女は相続で２万５千フランしか得ていない。それで死ぬまで兄や妹の援助に頼らざるを得なかった。もっともスタンダールが彼女を助けることができるようになるのは1830年，７月革命後の王政の一領事となってからである。５月10日，彼はグルノーブルから

今度はひとりでミラノへ帰っている。彼が帰った翌日，メチルドはミラノを数日不在にしたのでスタンダールは彼女の帰りを待ちながら愛の心の昂揚を覚えると同時に臆病さにも負けず劣らず苦しめられた。メチルドの前では自分の思っている言葉など露ぞ口にする勇気もない。たゞ，彼女が言葉をかけてくれるのを千秋の思いで待ちわびる。その瞬間こそ明暗をわける筈であると幾度となく自分に言いきかせる。9月30日の夜9時半に確かな希望があるように思うと書いたかと思うと，その3日後には喋りすぎたと反省している。また，ある日のこと，彼女の従姉であるトラベルシィー邸から退出の際にメチルドがスタンダールに一言話しかける。すると彼女の声がいつまでも彼の耳に残る。他の日にはメチルドの許から打ちのめされて退出して来ると，一週間以上も読むことも書くこともできないで『リュシアン・ルウヴェン』の主人公ではないが《この調子でゆくと，私は夢中になるだろうし馬鹿にもなる。》と，悶々とときを送る破目になる。メチルドがミラノを不在にした機会を捉えてスタンダールは彼女に次の如き手紙を出している。

《今日，私はたいへん嬉しいのです。他でもありません。この手紙に日付を書くということがです。1ヶ月たてばあなたにお会いする幸福を望んで居ります。けれどもこの30日間をどのように暮らすべきでしょうか。楽しみや散歩が絶えるごとに自己反省にとらわれるのでうつろな恐怖を覚え居ります。幸いにもあなたがおっしゃったどんな些細な事々も幾度も書き留て思いだしては喜んでいるので御座居ます。想像力が麻痺してまいりますと，あなたが不在なのだという恐ろしい考えが信じられなくなります。そして，毎日毎日私の心はいっそう憂苦に落ちるので御座居ます。私にはよく分るのですけれど命ある限りあなたを愛してゆくことになりましょう。あなたが何をなされようとも我が魂に触れた形象やあなたから愛されている幸福から画いた形象は少しも変りますまい。その形象は他の幸福に対してどれほど私に軽蔑感を抱かせたことでしょう！……》

この手紙は1818年11月16日の日付がある。メチルドがミラノにいる限りは

時々スタンダールはメチルドに迎えられる。それから，彼は彼女をトラヴェルシィ夫人邸に送るのであった。しかし，二人の関係はあくまで友情の域を越えるものではなかったらしい。あるとき，メチルドが彼をトラヴェルシィ夫人に紹介しようとしたようであるがなぜかスタンダールは彼女の好意を断ったと言う。彼にしてみればそれもメチルドのことしか脳裏になかったからであろうが，その結果，トラヴェルシィ夫人から憎まれる仕儀となる。

ディヴァン版の一巻にメチルド物語と題された断片私小説の一節に次の各句がある。

公爵夫人は瞑想に耽っている。

《……私は愛しているものゝ全てを失いそうだわ。……伯爵夫人（メチルド）の姿が見えないようだわ。あゝきっと彼女はあのポーランド人の無駄話に気をとられているのだわ。ボロンスキー，ボロンスキー（スタンダールのこと),あなたはよくも私を苦しめておくれだね。あゝ私がどんなにかあなたを憎んでいるかお分りになって。》

ボロンスキー曰く。

《……ダンボリ夫人（トラヴェルシィ夫人）は私が彼女の友を愛しても許してくれるだろうね。》

トラヴェルシィ夫人の夫はイタリア王国の貴族員議員になりそこなった人物であるが，夫妻は1814年当時，反フランス活動をしている主だった連中であり，ブリナ大臣を暗殺した一味と目されていた。ミラノ年代記にも夫人は奸策を好む残酷な女という名を頂載していると言われる。このような夫人の反フランス感情が漂うサロンへスタンダールが赴くことを拒否したのも頷けることである。それで，夫人は反仏感情も手伝ったのかスタンダールを手ひどく遇したらしい。そこで，彼の方も勘に触れたと見えて夫人に関した何かスキャンダルを公表して報復しようとしたけれどもメチルドに遠慮したことと，その結果を憚かって実行できなかった。

ある日，会話のさなかにメチルドは彼にかすかに真意を見せたのであるが，

恋人と話している幸福で有頂点になっていた彼はこの慎み深い女のはにかんだ告白をとらえる機敏さを失っていた。彼女は自分の友だちの一人にかこつけて恋の話を彼に語り続けて，

《その方の運命を考えて御覧下さいな。毎夕，女の許をたち去ると彼女の愛人は別な娘を訪れるのですって。》

スタンダールはこの話が胸に残っていたものの長いあいだ，この話題の男がよもや自分に擬せられているとは露ぞ気がつかなかった。恋愛は愚かな16才の小娘を賢くもするとは，エルヴェシウスが情熱に就いて説明した際の譬喩であったが，反対にそれは利口者を逆に16才の愚か者にもする苦い体験を彼は味わったのである。事実，毎夕，スタンダールはメチルドの許を辞すると，カッセラ伯爵夫人やニナ・ビガノをお訪れる習慣を持っていたのである。カッセラ伯爵夫人はクレモーヌの出身で結婚と同時にミラノに居住した美しい女で，1816年にスタンダールが夫人を識った頃，20才そこそこであったが三年前から未亡人であった。彼女は愛すべき狂気じみた言動で名高い存在であった。1822年，ボルヂア伯と再婚している。彼女が未亡人であった時期に毎晩の如くスカラ座の彼女の桟敷を尋ねるのがスタンダールの日課の一コマであった。もう一人のビガノ嬢と彼はどんな関係にあったのであろうか。彼は一週間に三晩彼女のサロンへ姿を見せることにしていた。彼は彼女のピアノと歌との才能を高く評価していてイタリアにおける第一級のアマチュアであると思っていた。スタンダールは彼女が歌うメロディをメチルドを恋する思慕の糧として聴くのである。彼の懺悔録『エゴチスムの回想』によると，ある日，ビガノは人々を見送ってから彼に〈ベエール，あなたは私の愛人なのですってね。〉と，気を惹いたところ彼は即座に〈とんでもない。〉と，彼女の手に接吻もしないで冷やかにたち去ったと言う。上述の『メチルド物語』と同様われわれはメチルドを想う彼の心境をこの逸話にも見出すことができるのである。さらに，『恋愛論』の第三十一章に「サルヴィアッチの日記抄」があるが失恋して自殺した男の体験記である。しかし，その略筋は結末と登

場人物の名を変えるとまさしくスタンダール自身の体験記なのである。

《叶わぬ恋のやるせなさ。生きているのが呪わしい。もう何ごとも興味がない。嫌な天気だ。雨が降っている。季節外れの寒さで長い冬を越して春を迎え始めていた自然がまた陰気な姿に返ってしまった。

もの静かな分別のある友人で，退役大佐のスキアセッチがやって来て二時間相手になってくれた。

「あの女のことを考えるのはよせよ。」

「よせって，どうすればいゝと言うのだ。それでは私は軍隊が好きだったからもう一度好きにならせてくれ。」

「あの女を識ったのが運のつきだな。」

私もそう思う。それほど私は打ちのめされ気力はないし，それほど今日は滅入った気持だ。……

スキアセッチが帰った。私はどうしようという目的もなく，雪降る外に出る。識りあった当初，毎夜，彼女と会っていた頃から住んでいる私の部屋，このサロンが私には堪えられなくなった。どの絵画もどの家具もかって幸福を夢見ていた当時の私を見守っている。私がその幸福を永遠に失ってしまった今は何かそんな幸福に価しない男だと私を見て責めたてるのだ。》

《私は心臓のあたりを突き刺される思いがした。居たゝまれなくなってあたふたと隣家の軒下に身を寄せていた。いっ時に胸に湧く数々の思い。偶然，カーテンが動いたのだろうか，あれをからげていたのが彼女の手であったらなあ！》

こゝに読まれる如くわれわれはスタンダールがメチルドに覚えた思慕の情がいかに激しく純粋なものであったかを推察することができるであろう。また，この文章は『リュシアン・ルウヴェン』でリュシアンとシャトレール夫人とが見せる姿と現実の彼とメチルドとが見せる姿を彷彿とさせる。次の手紙にもスタンダールのそうした心境が滲みでている。

《デンボウスキー夫人に，1819年5月　あなたが出発なさってからなんと

時のたつのの遅いこと，5時間半しか経過していないとは！　此の40日間どしようと言うのやら。あらゆる希望を絶つべきか，暴動に向いとび込むべきか。セニス山を越えるだけの勇気が私には失せているのぢゃないかと怖れて居ります。いゝえ，あなたと私とのあいだに山脈が介在するとは決して同意できません。…でも多分あなたの目には私が滑稽者として見えるので御座居ましょう。私の臆病さや沈黙はあなたを落胆させたことでしょう。私があなたを訪問すると疫病神でもやって来たように御覧なさ居ます。私は自分自身が嫌になりました。…しかし，私はあなたから離れる勇気を持合せて居りません。その癖あなたの前に出ると子供の如く臆病者になってしまうので御座居ます。私はあなたを称賛してさえ居ればよいのです。自分をたいへん劣った俗な男と思うべきでしょうか。》

この手紙は正確には5月12日の日付を有するであろう。此の日，メチルドは二人の息子カルリノとエルコリノが学んでいるミラノからそう遠く離れていないヴォルテラのサン・ミケレ教会附属学院へ向ったのである。一方，スタンダールはメチルドの傍らに居たいと言う望みもなくなり，たゞ，彼女に会うことだけが生き甲斐となり，彼女に会えない生活に堪えられなくなっていった。そして，6月の声を聞くとメチルドを想う気持を抑えることができなくなってしまった。6月11日の手紙によると彼女が滞在している町をせめても眺めたいと願って，遂にミラノからリヴォルノへ出発し，ピサからならヴォルテラの城壁を眺望できると言われてそこへ行こうとした。しかし，途中で緑色の眼鏡をかけ変装して夜だけ外出するように注意さえしていれば，メチルドに絶体発見されずに彼女の滞在している同じ空の下で生活できると恋心にせかれて6月3日にはヴォルテラへ来てしまったのである。到着してまもなく学校から帰るメチルドを彼は彼女に悟られずに眺めることができた。けれどそれも束の間でその夜眼鏡をかけずに出歩いてメチルドに見つかってしまったという。

そこで，彼は言い理由と恋心に満ちた手紙を7日に出す破目になる。

《1819年6月7日ヴァレーズにて。(実際はヴォルテラで書かれたであろう。)

《夫人，あなたは絶望に私を落し入れます。あなたは幾度も繊細さに欠けるとて恰もあなたにはこの非難がなんでもないかの如くに私を咎めなさいます。ミラノで別れる際にあなたが私に下さる手紙がムーシュに始まり心遣いに欠けるとて私を咎めなさるとは誰が私に予言したでしょうか，誰もいやしません。あゝ情熱にかられない男なら節度のある分別のある振舞を易々とするでしょう。さて私は自問自答してみますに慎しみに欠けることはなかったとは思いません。でも自分の行為に責任が持てない程に狂おしい情熱にひきずられているので御座居ます。私は乗船しないことを誓い少なくともあなたにお会いしないことを誓っていたので御座居ます。このような決心に抱らず何かある強い力が私をあなたの滞在してみえる土地へ導いてしまったのです。これから後はこの情熱が私の生涯の大事件となってしまったと明瞭に自覚致して居ります。あらゆる興味，あらゆる理由もこのことを前にして色褪せてしまいました。淋しい長い夜こそあなたに会うために人を殺す必要があるなら殺人者となりかねない時間です。私はこれまで三つの情熱しか経験して居りません。すなわち，1800年から1811年にかけての野心，1811年から1818年にわたって私を欺いた女(アンヂェラ)に抱いた愛，そして，一年前，私を支配して絶えず大きくなるあなたに覚えた愛がそれです。こうした情熱の俘虜となっているときは目下のそれに係りのないあらゆる快楽も私にはなんの価値もありません。幸福を齎らすものであれ不幸を齎らすものであれその情熱は私の時間をすっかり満たしてしまうので御座居ます。此の夕，あなたに会わないというあなたに対する尊敬のために私が払っている犠牲は僅かなものであると思われますか。私は自分がその犠牲に応しいとは思いたくありません。一昨日，私が仕出かした筈の過失に対する償いとして，私はたゞあなたにそうした犠牲をお見せしようと思うので御座居ます。あなたに執ってはこの償いはなんの価値もないのでしょうが，あなたから離れて会いもせず恐

ろしい幾多の夜をすごしてきたこの私にはこうした代償はもっとも恐ろしい刑罰以上に堪えるに困難な犠牲なのです。この償いは生贄の極端な苦悶によって，それが供された崇高な女に応しい犠牲なので御座居ます。あなたにお会いしたいという抑制のきかないこの願望が投げこむ心の動転している最中に私がともあれ今まで守っている一つの資格が御座居ます。……それは完全な真実ということです。木曜の朝，あなたは私が非常に危険な考えを抱いて居たのでその夕方起ったことはあなたに執って必然のなりゆきであったと私におっしゃいますが，この危険なという用語こそ我が魂の奥底まで傷つけるものなのです。私が幸いにして心臓に突き刺っている宿命的な矢を抜きとりうるものでしたら，この危険なという用語はそうする力を私に与えたにちがいありません。いゝえ，あなたの魂は私の魂を理解するには余りにも気高くすぎるのです。あなたは立腹していらっしゃいます。あなたはペンから洩れる最初の用語を役立せます。あなたの非難と私の言い分に就いてあなたがその人の証言なら申し開きなさらない人を審判官として撰びましょうか。若し気高く崇高なデンボウスキー夫人が木曜日の朝の私の行為が計算されたものと信じられるなら……私はもう遠くへ行きましょう。私は以前少しも愛したことのなかった女たちなら誘惑する才能を持って居ましたが，私はあなたを愛して以来臆病になって居ります。あなたの傍らに居る場合の私の狼狽ぶりからそのように判断おできになるのじゃありませんか。木曜の夕，喋らなかったとしたら，私があなたを愛していることを善良な校長も含めてあらゆる人々が気づくでありましょう。あなたの傍らでは使ったこととてない筈の女性を誘惑する才能を私とて持っている筈でしょう。専ら成功することだけを身上とするなら，私は自分自身のためにあなたを得たいと思うでしょう。でも，私の場合は私が想っている女のためにはなりますまい。あなたが私以外の誰かを愛しているのじゃないかと疑いだしたら私は赤面し，あなたから愛されてさえもきっと幸福はないと感じると思います。若し，あなたが欠点を持ってみえたとしたら，私はその欠点を知らないとはいう筈はありますまい。

実のところ，その欠点を熱愛していると告げるでありましょう。実際，この極度の懐疑をさえ熱愛していると申すでしょう。恐ろしい夜をすごすことになりましょうとも，このように愛されたいし，真実の恋とはこのように振舞うのではないでしょうか。真実の恋は誘惑を余りにも自分に応しくないものとして斥ぞけるのでは御座居ませんか。

私はあなたを誘惑する才能を持っている筈です。そして，この才能の力を信じません。なぜなら使いはしない筈ですから。そんなさもしいことをすれば遅かれ早かれ欺むかれたとお気ずきになりましょう。あなたを得たとしても決してあなたから愛されることなく私は死すべき運命であって，あなたに捨てられることの方がいっそう私には恐ろしい筈だと思っているので御座居ます。人間が極端な愛情に支配されているとき，その男のとったあらゆる言動はその人間の価値を証明しはしません。その男に就いて彼の価値を証明するのはその生活のすべてです。そんな理由で，あなたの足許で一日中あなたを愛し，さもなくば憎んでいると誓ったとてそんなことはあなたが私に与えることができると思ってみえる信用の度合になんの影響も持つ筈はありますまい。語る必要があるのは私の命のすべてです。然るに私は自分自身に就いてごく少ししか分っていないとは言え，さらに私を識っている人に執ってもさ程興味がないことゆえともかく会話でなんの種もないときにあなたは私が自分自身を誇りに欠けた，そして，一定不変の態度に欠けた男であるかどうか試しうるのでは御座居ませんか。

丁度，私がミラノへ来てから5年になりますが，以前の生活に就いての噂は間違って居ります。5年間様々な状況で経験されただけに若しあなたが遠慮なく私の性格に就いて考えて下さいますならば，私の生活の最近の5年間と任意の男の5年間とを比較して頂けないものでしょうか。才能では私より非常に輝やかしい多くの生活，私より幸福で満ちた多くの生活を発見されるでありましょうが，私の生活以上に名誉に富んだ一定不変に満ちた生活なんて私には信じられないことです。このミラノで私は幾人もの恋人を持ったで

しょうか。名誉に関して私は幾度とちったでしょうか。……》

先に一寸引用した6月11日付の彼の手紙はメチルドとの恋愛の頂点を示唆しているものである。そして，それが成功しなかった恋であったがために成功した恋の対極としていつまでも口惜しさに滲んだ鮮明な像となってスタンダールの心を掘り起し続ける。先の日付の手紙にはそうした意味がある。と言うのは1820年3月9日の覚書に次の如き文章が読まれるからである。

《大いなる効果，こんなことくらいで6月10日に起きたことを壊してしまっていゝものであろうか。……》

手紙でわれわれはそれを知ろう。

《……私が強引に門を開けようとしたと，あなたはもう思ってはいらっしゃるまいと考えたことを告白します。それで，非常にいゝ気分になって居ましたけれど，同時に臆病にもなっていたのです。子供に聞かす話題もなかったのですから確かに気づかれるところだったのです。われわれが学校に入った時には本当に間の悪いことになったと申しますのはどうしてもあなたと向いあって充分にあなたを直視することになってしまったからで御座居ます。要するに2週間以来私に生き甲斐を得させ期待さえしていなかった幸福を楽しむことになったのですものね。学校の門のところでこの幸福を拒否しようと致しました。すなわち，そうした幸福を支える力がないと感じていたからで御座居ます。階段を登りながら我が身をやっと支えていたのでした。確かに繊細な心の人々と一諸でしたら私の気持は悟られた筈でした。遂にあなたにお会いしたのです。その時からお別れするまで混乱したことばかり考えていました。たいへん饒舌だったこともあなたに見とれたことも骨董趣味をぶったことも覚えて居ります。若しその際に繊細な心遣いに欠ける言動をしてしまったならそれは大いにありうることです。けれども，私はそんな積りは少しもなかったので御座居ます。たゞテーブル式賭博台を支えようと夢中になってやったことなのです。この瞬間が私の生涯でもっとも幸福な一時であったということができるのですが，それは見事に脱してしまいました。こう

した結果こそ愛情深い魂を持った人々の悲しい宿命と称すべきで，苦痛なら極く小さな点まで思いだすのですが，一方，幸福ないっ時は余りにも我を忘れるので思わずそのいっ時を逃してしまうことになるので御座居ます。

その翌日の夜，あなたにお会した際，私は嫌われたことをはっきりと自覚しました。よもやあなたがジョルジュ氏の恋人であり得たのであろうかと考えました。……》

この手紙，及び，先述した20年3月9日の覚書，さらにその後の両人の様子から判断すると，スタンダールは愛の狂気から突除何か礼を失する行為を彼女になし，しかもその行為の瞬間が彼のそれまでの生涯に執って最大の幸福であったと告白している。そして，その形象が理性に判断を求めるのではなくて，短絡的に感覚どまりとなるために次の行為が麻痺する。こうした手紙に読まれるスタンダールの所作にメチルドがどのような態度で接したかは想像がつきかねる。なお，この手紙の一節に，小間使が夜学校で女主人が彼を待っていたという文句がある。

……会話が途切れたとき，メチルドはこのヴォルテラでスタンダールが度々彼女に会いに来るのが迷惑であり，自分の名誉を損うものと感じて彼にそのことを納得させようとして機会を狙っていたらしい。

「あなたにお話があります。……あの私には利口な助言をしてくれる母が居ません。この町では独りぼっちで暮している女なのですわ。ジョルジュさんや小間使にそう申して悪ければ，殆んど独りぼっちと申しましょう。こうした女はどんなつまらない評判にも注意しなくてはなりませんの。あなたは私の所へ来てしまわれたけれど。……」

「それで……」と，彼は息を潜めた。今にもメチルドが自分に恐ろしい判決を下すのじゃないかと覚悟しながらもひどく怖れた。きっと，ヴォルテラから出て行ってと言うのであろうと思った。裁判官の前で心妙にかしこまっている被告がまさに自分の一生を決める判決を受けようとする態度を示して哀れであった。彼のこうした態度が対局する者を一変させた。メチルドは自

分の立場が有利になったのを感じた。相手が今小羊になっていくのを敏感に気づいていた。もう強者と一戦するのだという張りつめた気持がなくなった。けれども，そのときから母性衝動がうごめくのを悟らねばならなかった。スタンダールを可哀相に思う。でも先を続けねばならない。彼女は消えいるような声で話した。

「この町からミラノへ戻って下さい。それとも胸のうちなどとおっしゃらないと誓って下さいませ。そして，お会いする機会を減して欲しいの。それにお会いしている時間を短かくしたいのですわ。」

こう告げると彼女はどうしてそうしなければならないかを説明した。私の周囲の人々はあなたの訪問をかれこれとり沙汰していますし，殊にジョルジュ氏はあなたもそう感じていらっしゃるように妙に気をまわすにちがいないというのであった。一方，彼は彼女が喋っているあいだ自分の惨さに打ちひしがれて一言も抗弁する気力もなかった。

約20年後にすら，《生を謳歌しながら死の宣告を始終耳にしている意気地なしをまあ想像してくれ給え。》

と，『リュシァン・ルウヴェン』のなかでこの当時のありさまを回想してか思わず心のなかを見せている。今，メチルドはスタンダールを送りながら彼に先刻要求したばかりのことが何か彼の気持を残酷に傷つけるものがあったことを悟っていた。それで，送るという礼儀で本能的にしょげている彼を慰めようとしたのである。メチルドはスタンダールにできる限り気を使って軽やかに言った。

「さよなら明後日ね。」

よろめきつつ彼は振り返った。そんな彼の様子を眺めて彼女は可哀相になった。そこで親しい友情のしるしとしてメチルドはイギリス流に彼の方に手を差し出した。

スタンダールは彼女の仕草に思わずその手を取り，つと唇へ持っていった。真近に女の顔を感じた。彼女を腕のなかに抱きしめて頬に熱い接吻を浴せて

いた。メチルドは身を引く力がなく彼の胸に身をゆだねた。女の重みを全身に受けて彼は烈しく抱擁していたが，やっと彼女は身を引くことができたもののその瞳には涙があった。その涙は深い優しい魂から洩れたものであることを物語っていたが，やがてのこと，メチルドは自らこの舞台の幕を引く決心をした。そして，

「さよなら，あなた……」と，つぶやいた。

スタンダールははっとして我にかえったが，メチルドの方は言いなおした。

「さよなら，モナミ，ねえ，明日……どうか手を離して」……。

彼は幸福で有頂点になり，自分がドンファンから批判されると，この場合いかに間抜けであったかに気づくどころではなかった。多分，その場の口惜しさにかられて自己嫌悪の気持からしでかしたことであろうが，翌日，ヴォルテラから去ってしまった。此の11日付の手紙に次の言葉が読まれる。

《……あなたは胸の想いに関することを一切口にしないようにという誓いを私に要求なさいました。そのような誓いが私にはどんなにか辛い誓いだったかしれません。けれども私はあなたとの誓いを守りました。そして，とうとう出発しました。なんとかしてあなたを憎もうと思ったのですが，私の心には少しも憎しみが湧いてきませんでした。……》

このようにスタンダールが有頂点になり，私はあなたの愛人であると，明らかにメチルドに感じさせるが如きヴォルテラでの逢引直後に出された彼の手紙の調子には確かに彼女を激しく怒らせるにたる厚かましさが滲みでてしまっている。心から偽善者になりきれない正直な男の短所である。相手に同情してのことではあったにせよ，自分の軽率ぶりを反省し後悔して自ら責め苦しんでいるメチルドに，そうしたスタンダールの調子は主人としての態度を示すものであった。そこで，メチルドがスタンダールを叱責する意味からも二度とお会いしたくないと，今までにない厳しい文面の手紙を与えたのも自然のなりゆきであったであろう。スタンダールにしてみればこうした微妙な問題はおたがいがゆるぎない信頼に支えられているものならば

当事者同士が自己の心をまったく包み隠さず素直に相手に打ちあけて解決すべき性質のものであった。それで，彼はそうすることが誠実であると信じて当の相手に真実を告げる言動に出るのであるけれども，メチルドの場合，逆に彼は彼女の決意に最後の決定を下すべき槌を自らおろす結果となってしまった。ほどなく彼自身，自己の素直さがメチルドに与えた影響を悟った。そこで，われわれはスタンダールの弁解と哀願でしどろもどろになった手紙に幾通も接することになるが，先ず1819年7月20日にフロレンスから出されたものから読むとしよう。

《あなたのお恵みを失った今，私が敢えてお手紙を差しあげることはあなたに対する尊敬を欠く如く思います。若しこの点に就いてあなたが嫌悪を感じなされたのなら，少なくともこれ以上，自分の不幸を考えますまい。人に知られることなく私の手紙を破いて下さいませ。

若し反対にあまりにも誇り高いとは申せ感じ易いあなたが私を不幸な友として扱って下さる御好意がおありでしたら，また，あなたが近況を私にお知らせ下さいますなら，ゆかなければならなかったボローニュに滞在しているこの私にお手紙を下さいませ。……本当にあなたの健康が気がかりです。若しあなたが御病気であったら一言，私にそうですのと知らせて頂けない程にかたくなにおなりなのでしょうか，でも万事に期待しなければなりません。相変らず，弱々しいランプの明りにも似た静かな分別のある光で暖っている心ほど幸せなものはありましょうか！このような心を持っているひとが愛すると口にする時，彼は自分にも，他人にも，迷惑をする筈は御座居ません。火山の如き災に燃える心のひとは，熱愛している女に気にいられることはできないで何か狂気じみたことをしでかし，繊細な心遣いにかける者と女に思われ，同時に自分をも灰にしてしまうもので御座居ます。》

こうしたスタンダールの手紙にメチルドは相変らず冷淡な返事を彼に送ったと見える。それにも懲りず彼は答える。この手紙には1819年8月25日の日付がある。

《三日前，あなたのお手紙を受け取りました。あなたの書体を見てあまりにも激しく感動してしまった私は礼儀にかなった態度で答える力はなかったので御座居ます。……私に対してあなたがどんなに厳しくありましょうとも，あのボローニュ当時，私が幸福であった多くの瞬間はそれでもあなたにおうている筈です。あなたが10日以来滞在して見えた筈のこの幸せの町のことを絶えず考えて居ります。マジュール門から出ると右手にあって私がしばしば訪ねた門の下を私の魂は逍遙しているので御座居ます。あの宮殿で囲まれた美しい丘を思い浮べます。あなたが散歩していらっしゃる庭から眺められます。あなたからきつく処遇されることのなかったこの土地は私に執って神聖な所です。フランスに私を追放する事件を知ったのはそこでです。この追放が如何に辛いものであったにせよ，私はあなたが見えるこの土地に私を結びつけている絆の力を追放はいっそうしっかりと感じさせたので御座居ます。……発見されるのじゃないかと恐れながらも，通りながら殆んど眺めさえしなかったこの邸に住まって居た女に何時も思いをめぐらしたのもそこです。私が取り囲まれている詐欺師からできる限り自分を守るべく運命づけられている長い二つの書類を自身で写し取った後，あなたにお便りしているのです。もっとも執念深く周到に謀られた憎悪が一人の息子に挑むあらゆることを私は父から体験しました。すべてそれは非常に見事な偽善で粉飾されているので御座居ます。私は継子なのです。そして，表面上は嘆く必要はないのです。はっきり申せばこのことは他の時代に生を受けたのでしたら，天にも昇る心地で居られたろうと思います。そして，それがこのような結果を狙って計られたことは疑いますまい。この遺言は9月29日付です。しかし，その翌日，財産に対する害に私をまったく無感覚にしてしまうであろう小さな事件がもちあがるとは思っても見なかったことでした。私に報いられる唯一の感情とも言うべき憎悪の努力と，その源を知りながらも私は明らかにエネルギッシュな情熱を感じて，それに共鳴すべく宿命ずけられて居ります。ここに至ってこの遺言は事件の関係者間では好奇心と感嘆の対象となって居ります。と

もかく遺言が私に与えた打撃を飾る手段を見つけたと思っているので御座居ます。と申しますのは妹たちと手間のかかる訴訟となる筈です。妹の一人は私に執って非常に可愛いのです。こういう次第で，たとえ世継であっても私は今朝妹たちに父の財産の三分の一を与えると提案したのであります。……かって幾つも大きな旅行をしようと計画していた時期が御座居ました。このような旅行とか乗馬に関するあらゆる趣味が熱狂的情熱に席を設けるために随分前から色褐せてしまわなかったとしますと，私はひどく失望してしまった筈で御座居ます。でも，今日，此の頃はこの烈しい情熱に背を向けて居ります。この世でもっとも愛している女に，もっとも尊敬している女に嫌われる程激情は私を狂気じみさせることができたのですからね。要するにこの世の万事が私に執ってなんの興味もなくなったのですね。……私が怖れている唯一のことは私が相続したことを知っているミラノの友だちにけちと思われることで御座居ます。……》

この書簡から判断すればメチルドから手厳しくなじられた彼は一切の希望が水泡でしかないことを充分に悟っていたと思われるが，それでも締らめ切れない毎日を悶々と送っていた。本当にメチルドは私を愛していないのだろうか。1819年の6月10日に起きたことは夢にすぎなかったというのか，と20年の3月9日の覚書にも彼は記していた。そして，このように苦悶に喘ぐスタンダールの姿をわれわれは彼がミラノを去る日にさえ認めるのである。

1821年6月，スタンダールは彼女と永久の別れを覚悟する。

『エゴチスムの回想』の第一章によると，

《メチルドが尋ねた。

「何時帰っていらっしゃるの。」

「もう帰って来ません。多分。」

そこで心にもない空々しい最後のいっ時がすぎた。たった一言で私の未来の生活は一変したに違いなかった。しかも悲しいかな！未来とは言っても，そう長い間ではなかったのに。この美しい肉体に宿っていた天使の如き魂は

1825年にこの世を去ったのだから。

住んだら骨を埋めるまではと思いこんでいたこの都，身も心も引きちぎられる思いで，私はこの都を去ったのだ。……遠ざかりゆく一歩一歩に私は気も絶え入りそうだった。吐くものはたゞ溜息ばかりだった。》

このメチルドとの恋で始めてスタンダールは愛することは如何なることかどれ程厳しい犠牲を要求するかを，狂気を誘う苦しみにさいなまれるかを悟ったのである。その苦しさに堪えられなくなると本能衝動のまゝに何時しか無意識に行動し，愛する女の窓下にたたずむと云う我に執って時間も空間もなくなる。従って，われわれの意識がその必須の条件とする筈の時間の展開を許さない人間存在の真空地帯があることをスタンダールは体験し深く悟ったのである。それゆえ，彼の恋愛の特質は受動の形をより示すわけである。相手の愛が語りかけるのを待つのである。

彼のこの宿命を能動的になれない愛を7才にして母に死なれたことにわれわれは原因があると思うのである。

彼の小説で，スタンダールはよく主人公に対してヒロインを二人とするがその中の一人は必ず母性の象徴を示す弱者を保護しよう，可哀相にと云う母なる本能に自分の運命をゆだねてゆく女性として画かれているのである。このようにスタンダールの小説のヒロインが可哀相にと云う憐憫の感情から可愛いと思い，やがて，恋に走るこの公理は彼自身がその実生活で深く体験したからである。メラニー，アンヂェラ，そして，メチルド皆決定的瞬間にこの要求を直観する。

スタンダールはメチルドと1821年6月に前述の如く別れてこのミラノから離れたのであるが，その原因はメチルドがはっきりと愛の片鱗すら彼に見せなくなり，むしろ冷淡な態度で接する方が多くなっていた。さすがのスタンダールも今はこれまでと観念せざるを得なかった。しかし，こうした両人の離別をいっそう早めた間接的原因が1820年にスタンダールの側にあった。

今一度，スタンダールとメチルドとの邂逅を振り返って見ると，当時，両

人は同じ政治思想に共鳴しあって面識を深めた筈であり，さらに後年自己の墓碑に〈フランス人アンリ・ベエール〉の代りに〈ミラノ人アリゴ・ベール〉と刻むことを実行したスタンダールではあったが，やはり，フランス人の血は争えずイタリアで行動の人となることを許さなかったのである。彼自身もこうした自己の無気力を一般的命題として1817年の『イタリア絵画史』のなかですでに認めるところであった。フランスのように高度に文明化された所では人間行動は気力に乏しいと言うのである。

彼の言行不一致の態度に基因するとみられるがオーストリアからはイタリア独立運動の秘密結社である炭焼党員と看做されて嫌疑をかけられた。また，一方では同志と思われる連中から彼の言動が彼等から理解される範囲を越えるとして敬遠される。すなわち，マレスト男爵とのスタンダールのしばしばの文通などが怪しまれたと考えられる。1820年7月23日付のマレスト男爵に宛てた書簡がその間の事情を伝えている。

《親しい友よ，私を仰天させる恐ろしい不幸に見舞われております。普通なら，そんな気を起さないと思うのですが，私がここでフランス政府のスパイであるという噂を妬み深い連中が流布させてしまいました。6ヶ月前から流布されているので御座居ます。幾人も私に挨拶しないのに気づきました。あのお人好のプラナが貴下から受け取った書簡に就いて私に書いてよこした時，私はあっさりと無視してしまったのでした。だからとて彼を恨みますまいい。それにしてもなんという恐ろしい一撃でしょう。一体このフランス人がここで何をしたと言うのでしょうか……》

続いて1820年12月22日付のマレスト男爵に宛てた書簡でもスタンダールがイタリアの政治情勢に触れた部分がある。

こうした事情は炭焼党員に執って面白くないことであろう。それに彼等にはスタンダールの通信相手が気に喰わぬ男であった。当時，マレスト男爵はパリ警視庁長官の要職にあったと言われる。後年，スタンダールが出版などで何かとマレスト男爵に世話になっている事実は例のヴォルテールがイギリ

スで果した役割をたとえスタンダールが無意識からであれ果していたとわれわれさえ疑惑を持たざるを得ない。

そこで，こうしたスタンダールの態度を心良く思わない炭焼党員たちはあちこちのサロンからスタンダールをあぶり出し戦術でもって追い払おうとしたと考えられよう。

それで，あのメチルドがこうした噂を知ってスタンダールにどのように接したかはわれわれにも彷彿としてくる。

此の1820年を境に見られるイタリアの政治情勢はメッテルニッヒの弾圧にもかかわらず，その国民運動は憲法発布と議会政治とを要求することに目的を定め盛んに行われた。そして，二・三の君主国では人民の運動に圧倒されて憲法の施行を見たのである。たとえばナポリ王国，サルデニヤなどが新政治を20年，21年に行ったのであるが，このような独立運動の部分的達成はかえってメッテルニッヒに徹底的弾圧にふみきらせる結果になった。彼はライバッハで列国会議を開催して，ナポリ王国，及び，サルデニヤの新政治を鎮圧して北イタリアに厳しい政治干渉を加えていった。従って，スタンダールがパリへ帰った頃から，彼やメチルドが面識を持ち交際していた炭焼党員たちは次々と官憲の手に捕縛されていった。しかもメチルド自身も例外でなく渦中の一人であった。彼女は連中のなんらかの関係があったために厳しい訊問を受けたと言われる。しかし，その態度は誠に立派なものであったと伝えられている。すなわち，知人たちの不利になるような証言を始終拒否し続けたというのである。このような事件に妻が荷担していたことからのショックからでもあったのであろうか1823年夫が死ぬと，恰もメチルドもその後を追うが如く1825年に病重く亡くなった。

1821年6月21日にスタンダールはメチルドとの4年にわたる愛の葛藤に疲れて故国に帰ったが，グルノーブルには戻らずパリはリシウリュー街45番地にあるブリュセル・ホテルに再度逗留する。このホテルの雰囲気が好きであったのと，友人マレストもここの常連であったからである。久しくパリの生

活から離れていた彼が再びここで生活する仕儀になった時，多分，彼は自分が祖国にいる筈なのにまったく異邦人となっている自己を認めて呆然としたことであろう。政治に於いても文学に於いてもそうであったであろう。スタンダールがミラノから帰った1821年にベリー公の暗殺があったが，此の事件がミラノであったならばロマンチスムは拍手を持って迎えたであろう。だが，フランスでは逆に悲憤の涙で迎えられたのである。従って，スタンダールはフランスがさっぱり理解できなかったのである。ミラノでのロマンチスムとこのフランスでのそれとの相異を明らかにしなければ，彼が『ラシィーヌとシェークスピア』を執筆する動機の展望すらもわれわれに理解できないであろう。スタンダールがナポレオンの失脚後，再度ミラノの地にアンヂェラと共に生活していた頃，フランス知識人はスタール夫人の『ドイツ論』やシュレーゲルの『演劇文学講義』によってヨーロッパに興った浪曼主義を漠然と知りつつここに古典文学と現代文学（浪曼主義）との二大潮流があることを認識していたのである。しかし，彼等は充分に本質を認識していたとは言い難い。特にその現代的傾向を無視していた。1823年になっても大部分の文学者も批評家もスタンダールがミラノで経験したような浪曼主義の正体には殆んど無知に等しかったのである。しかしながらフランス浪曼主義もイタリア浪曼主義と同じく政治と無関係ではあり得なかった。文学上の教義である以上に政治的意見の表現であった。ウイン会議の結果，フランスは大革命とナポレオン帝政期を径てルイ十八世を元首としたのである。そして，7月革命の前夜まで次のシャルル十世も大革命以前の王政を夢みて議会の保守派と結び反動政治を続けたのである。此の間，知識階級は時の権力にどのような反応を示したのであろうか。彼等は帝政時代に大いに苦しみ，今はたゞ平隠な生活を願い，そうした生活が約束されれば自由があると考えるに至ったのである。従って，権力に従順であるばかりかむしろ積極的協力によってその恩恵にあずかろうとしていたのである。青年文学者の多くは帝政の反抗信念から，あるいは，敗戦によっておくれを取ったフランスに残された遺産で

ある文学的優越を確信してそれぞれの信念と手段に応じて国家に協力する必要を感じとっていたのである。要するに熱戦は終結したけれどもその余勢がくすぶっていた。殊に知的青年層に残った。彼等は外国に対して知識上の冷戦を続けて敗戦の意識から脱却をはかったのである。彼等はそのような信念のもとに文学を考えて自ら浪曼派を名乗り，文学は時の社会の表現でなくてはならないとする極端な法王党ボナール伯の言葉をモットーとするに至ったのである。その主義主張は以下である。新しい社会的政治的秩序には新しい文学が必要である。従って，その文学は当然カトリック的であり王政主義的であり革命を導いたイデオロギーを排斥するものである。その扱う題材をフランスの歴史，殊にもっとも民衆に慕われた諸王の伝説の時代であり，もっとも純粋な信仰の時代である中世に取材して王室の悲哀と栄光を賛歌し，18世紀の物質主義に疲労を覚え，堅固な信仰の平安を再び見いだすことを願望する現代の悩める魂を救い，恋愛を信仰を諸王を歌うときにも常に神秘第一主義でなければならないというのであった。このように初期浪曼派作家たちはウルトラかそのシンパであったのである。このような政治的文学的状況下にあるフランスにスタンダールは8年ぶりに帰って来たのであるが，此の年，先述した通りウルトラに絶好の反動口実を与えるベリ公事件が起きた。この事件を機にますます反動的気運が濃厚になった。すなわち，出版の自由が制限され検閲が厳しさを増し，大学が監視を受ける事態を招いたのである。『赤と黒』におけるカスタネード師の属したコングレガシオンは文学の世界にも勢力を及ぼし，三つの会を支配した。そのうちの一つ「良き文学の会」は《かって文芸々術に光輝あらしめた古き原理の下に文芸々術を復せしむること》を欲するすべての王政主義信奉者を集めようとして，彼等の策謀は効を奉し，一挙にユゴー，ラマルティーヌ，ヴィニー，ノデイエなどの青年詩人，作家たちを獲得して会員としたのである。そして，彼等の作品が流行する。詩的恋の感傷，信仰の不安，そこはかとなきメロディを求める当時の趣味を満足させるラマルティーヌの詩集『冥想詩集』や聖書と王党的感興よりなる貴

族詩人ヴィニー，そして，将来一身に栄光を集めるユゴーのカトリックと王政主義的信念に燃える『オード』などであり，他国の作家ではウォルター・スコットがフランス人の中世趣味に答えて流行し，ミラノでスタンダールの知人となったバイロンもその絶望の哲学よりもむしろその東邦の幻，新しい形象の詩人として賛美された。こうしたフランス浪曼派とスタンダールのミラノ仕込みのロマンティシスムとはまったく本質を異にし，むしろそのサロンに出入したトラシーの『論理学』を読み，詩人としてはベルランジェを読んでいたが，彼等は決して浪曼派ではなく，反対に良き自由主義者たちであった。そして，シャトーブリアン，スタール夫人，ユゴー，ラマルティーヌ，ヴィニーなどの名声のある小説家詩人たちには好意を持たず，不誠実な連中とばかり嫌悪を示したのである。パリに在住していた彼の友人たちも孤独になり困惑しているスタンダールが気のどくになり，彼を楽しませようとした。此の時期にわれわれはスタンダールの友人に新顔を，そして，彼の死に際しては，あの『赤と黒』におけるジュリアンの友人フーケ如く，その墓地までお供をしたプロスペル・メリメを迎える。両人が知りあったのは『デバ』紙のランゲェイを仲介としている。ランゲェイとスタンダールは前者が『イタリア絵画史』に対して好意的批評を掲載してくれたのを機に交際が続けられた。われわれはその邂逅より10年後にスタンダールその人によってメリメの肖像を知ることになる。

《灰色のコートを着てむくれた鼻をして，たいへん醜く貧乏な若者の彼は厚顔しい様子をし極度に人に嫌悪を催させていた。表情のない小さな瞳はいつも同じ相しか見せず，その相たるや意地悪のものだった。まあ，こんな印象が交際している友だちのなかでもっとも親しい男と始めて会った時のものであった。》

と，スタンダールは回想している。そして，メリメを評価して，

《彼の心情に関しては確かなことは言えないが才能に就いては確信がある。》

と，述べている。彼等は同じ心情の持ち主で両人とも滑稽な心情の発露に

はひどく恐怖を覚える性質であったが，こうした用心さにもかかわらずその餌食となる。両人の共通の恋人リバンブレ夫人との争奪に殊にそうしたスタンダールの姿をわれわれは眺める筈である。われわれはこのブリュセル・ホテルに逗留していたスタンダールの生活を彼自身に回想して貰うとしよう。

《10時におきると，10時半にはカフェ・ルアンに行く。そこで，リュサンジュ男爵や従弟のコロンと挨拶をかわす。気に喰わないことにこの二人とも人間心理，及び，文学，音楽による人間心理の描写にとんと理解がないことである。……カフェ・ルアンでコーヒーとパイとで食事をしたあとでリュサンジュと一緒に彼の事務所まで連れだってゆくのであった。版画商の前で足をとめたりしつつ，テュルリ街のマロニエの木陰に涼を求めに行ったのである。この恐ろしい程の退屈な時間を忘却することができないなら自殺した方がましな位じゃないだろうか，と，私はつぶやいていた。全てが私には重荷だった。此の1821年にはまだ1816年代や1817年に例の絵画に就いて私をかりたてた『イタリア絵画史』に覚えた情熱の名残りを感じていた。それでリュサンジュが私のためにものにしてくれたパスで博物館に通っていた。そこで傑作の前に立つと，唯々，ブレラとメチルドが激しく思いだされて仕方がなかった。読書の最中にも連中のフランス語に相当する名を見ると私の顔色はさっと変るのであった。……人がパリで楽しく思っていることは全て私に執って恐ろしく感じられたのである。私自身，自由党員であるけれども自由党員の諸君を侮辱から害あるものと思っていた。私に執ってはその当時経験した全てに悲しい失礼な追憶のみを大事にしていた気がする。……イギリス版のシェークスピアの何冊かを買い，マロニエの木陰で読んでいた。そして，本をしばしば伏せてメチルドに思いをはせていた。》

失恋したスタンダールの悲哀をここにわれわれは読む。1821年10月19日に彼はロンドンに二度目の足跡をしるすことになる。今度の旅行は上述した彼の言葉から推察されるようにいつまでもふさぎ込んでいる彼を慰めるためにリュサンジュやマレストなどの友人が計画したものであって，スタンダール

とロロが先発して一週間後にマレストが一行に加わっている。スタンダールはシェークスピアの劇作には中央学校の生徒であった頃から，そして，1800年以降は殊にその作品を本格的に研究していたのであるから，本場でシェークスピア劇が上演されているのを常々観劇したいものと願っていたのであろう。それゆえ，友だちの企てにのったとみえる。彼は第一回目に渡英したときと同じタヴィストオック・ホテルに旅装をとき，六週間にわたって異国の空に暮すことになる。此の時代のイギリスは産業革命の進展にともなって時の支配者であるトーリーの反動政治も崩れつつあったが，日常生活では一食につき15スウも出せば食いたい放題の豊かな生活ができた。スタンダールはこうした生活を楽しみながら，一方では劇場や博物館通いにあけくれた。また，景観のなかでも殊にリッチモンドの絶景にみとれ，後に世界でもっとも美しい土地の一つに数えている。彼の渡英時，シェイクスピアものの第一人者は例のキーンであった。スタンダールは先づ彼が『オセロ』を演じているのを観劇した。続いて，彼の『リチャード三世』を観て感激してパリへ帰ったのである。われわれが彼が帰国した六ヶ月後，『ラシーヌとシェイクスピア』を書いたのを知る。しかし，彼は『アンリ・ブリュラールの生涯』でこの本の出版に触れて友人たちが私がどうしてこのような本を書いたのかと驚いたと回想しているのである。しかし，われわれはすでに1817年に出版された作品『イタリア絵画史』によって，彼が自己の文学観を除々にあらためつつあったことを知っているゆえさほど驚きとはしない。しかしながら彼の友人たちがスタンダールのこうした演劇観に驚いたのは相当の根深い理由があったのである。彼は中央学校で『イタリア絵画史』の主要理論の構成となったアベ・デュボスの『詩，及び，絵画に就いての考察』を習ったばかりか，同時にラ・アルプ，カーユアヴア，マルモンテルなどの古典派の理論をも勉強したのであり，1800年3月9日に妹ポリーヌに宛てた書簡の一部にも，

《お爺さんにシャルベェ書店でラ・アルプの『文学講義』を求めて頂きなさい。持っている必要があるし読んでおく必要がある書物ですからね。多分，

この作品はあんたを少々退屈にするかもしれませんが，垢抜けさせるでしょう。そして，時が径つにつれて報いられることを受けあいます。また，私の文学に関するノートを捜してラ・アルプであんたが読んでいる同じ問題点を私のノートで同時に読んだらよいと思います。こうした研究は必須のものです。……》

ラシーヌに就いてもその賛美は最上級のものであり，1802，3年頃の妹への書簡には必ずラシーヌを読むことを進めている。モリエールは1800年頃のスタンダールに執ってラシーヌほど感興を覚えなかったとしても，パリに出て来て生涯の目的である〈女優を愛人とし，モリエールのような喜劇を創作することだ〉としていた彼に執って，やはり主要な研究対象であったのである。従って，20才頃の彼はラシーヌ・コルネーユ，及び，モリエールなどの自国の悲喜劇こそ人間精神の完璧な所産であると看做して研究に励んでいたのであるが，当然，当時の自国の排外文学の影響をそこにみる。すなわち，外国の演劇を自国の演劇と比較すること，モリエールとゴルドニ，ラシーヌとシェイクスピアを研究することすら許さない国粋主義的感情のなかに生きていたのである。この外国文学排外風潮はフランス国内にますます強く伝わり1815年ナポレオンが完全に破れた直後に最高潮に達した。それゆえ，浪曼派の戦いの前哨戦は英独派文学に対する愛国主義の闘争として表現される。

それでスタンダールはこうした偏見，習慣，伝統に取り囲まれたまゝ，10年間というもの古典的な多くの喜劇や悲劇を研究したり，書き始めたりしていたが，1810年以後になってだんだん劇作に対する自己の能力に疑問を持ち始め，同時にフランス演劇を支配したその理論にも疑問を覚え始めていた。特に1805年以後，その傾向が見られ，彼の文学理論はラ・アルプから脱出することに活路を求めるに至ったのである。結局は『イタリア絵画史』に至って結実した理論，あらゆる国に共通な古典派の理想美に対して，各時代にその文学とその芸術理念があると考えるに至ったのである。従って，シェイクスピアが真に彼の神となったのもミラノ時代，すなわち，『イタリア絵画史』

出版と同年の1817年のことである。先述した通り敗戦フランスはその文学的，及び，芸術的愛国心の表現をいっそう強めたのであるが，この傾向は1820年から1825年に至っても，まだ，極めて旺盛であった。それで逆にイギリスの雑誌は揃ってフランスの知的ヘゲモニーを否定し，現在のフランスの道徳的，並びに，知的哀微を指摘してその原因を遠く17世紀のルイ十四世の宮廷に培われ，ナポレオンの時代に完成されたフランス人の主要国民性である虚栄心に見出したのであり，文学においてもそうした頽廃した風俗同様，フランスの作家はなんらの好奇心も革新の意欲もなく，最近のイギリス，ドイツ，イタリアに起った古典主義を脱した一大文学運動を知らず，この啓示に対してもフランスはただモリエールやラシーヌなどを持出す能よりないと非難し攻撃していたのである。スタンダールはミラノでイギリスの友人たちから彼のミラノにおける生活を叙述した際に簡単に触れておいたように『エヂンバラ』誌の存在を知った。例えば1816年9月の手紙で，

《私に『エヂンバラ』誌を読む機会を与えてくれた日は私の精神史の一大時期となろう。》

と，断言している。1821年，パリへ帰ってからもスタンダールは単に読者であるにとどまらないで進んで寄稿者となり，イギリスの次の如き諸雑誌に関係したのである。すなわち，1822年から1826年にいたるあいだの『ニュー・マンスリー・マガジン』，1824年から1826年にいたるあいだの『ロンドン・マガジン』(この雑誌は1820年に創刊され特にフランス文学に関心を示したが，フランス演劇に大反対だった。)，及び，1822年と1823年の『パリ・マンスリー・ルヴュ』などであり，そして，1822年から1826年にいたる4年間はこれらイギリスの雑誌との関係が最も深い時期であった。要するにスタンダールにそれらの影響が及んでいる期間であったのであり，彼が『ラシーヌとシェイクスピア』の第一部，及び，第二部を執筆し発表したのもこの頃である。ロンドンから帰った彼はシュトラスブルグで埋もれていた『恋愛論』の原稿と対面する幸運が待っていた。この『恋愛論』の出版後，これは神聖な書で

すと，嘆く破目になるとは露知らずモンヂイ氏はスタンダールに出版しようと約束したのである。彼は原稿の校訂をするためにブーニヨ伯爵夫人の居城のあるボオンヌーユで仕事をする計画を立てていた。しかし，そこへゆく前に好天に誘われ，彼が私淑するルソーが社交界から解放されて仕事をするためにやって来たパリ近郊のモンモラシーで一室借りる気になっていた。ジャクモンの証言によると，この村の活気に満ちた雰囲気が他の場所と比べていっそう自分に才気を与えるのだと，スタンダールは主張していたとある。以後，10年にわたって時々この森へ休息か，それとも仕事をたづさえてやってくる彼の姿を見る。1830年5月には『赤と黒』の第二部を執筆している彼の姿が眺められるであろう。スタンダールがイギリスで本場のシェイクスピアものを観劇してパリへ帰っは数ヶ月後，フランスで外国演劇の関心が漸やく高まったのを機会に，イギリスのある一座がパリに来てシェイクスピアものを上演することになった。しかし，最初の二回の公演，すなわち，7月31日と8月2日は大いに混乱をきたし『オセロ』は殆んど無言劇で演じられ，8月2日には観客が始めから他のフランス劇の上演を要求して幕があけられなかった。この事件は単なる文学的事件というよりも政治的事件の様相を示し，この機会に自由主義者はナポレオンの死後イギリスと神聖同盟に抱いていた憎悪をはげしく燃えあがらせていた。そこで，右翼の新聞『モニトゥール』，『デバ』，『ガゼット・ドゥ・フランス』などはこぞってイギリスの俳優に同情を寄せ，自由派新聞『コンスティテュシオナル』，『クーリィエ・フランス』などは自由主義者の意図と愛国心に私情のないことを指摘して弁護している。その後，この一座はポルト・サン・マルタンでの上演を中止してシャントレーヌ街で小数の予約者のみの前で8月20日から10月25日まで『オセロ』，『ロミオとジュリエット』，『リチャード三世』，『ハムレット』などを演じて引揚げたのであった。1822年9月1日付のスタンダールの書簡によると，この事件を知った彼は自分の憤慨を急いで読者にも伝えたかったのであり，ロンドンとパリのイギリス人に対しても個人的に弁明し，同時に自分が多年にわた

って研究した創作技法をこの機会に公表しようと考えたのである。その時，此の年の1月にパリ在住のイギリス人が創刊し，スタンダールがその創刊号から度々寄稿している雑誌の編集者にこの事件に就いて意見を求められた。そこで，彼は取りあえず公演がシャントレーヌでまだ続いているあいだに『ラシーヌとシェイクスピア』の第一章となったものを執筆し，10月号で答えている。それから3ヶ月後の1823年1月に同誌が今度は彼の喜劇論を掲載したが，それが『ラシーヌとシェークスピア』の第二章を形成した。以上の結論とも言えるロマンティシスムとは何かが，第三章を構成して，1823年3月上旬に55頁の小冊子である第一の『ラシーヌとシェイクスピア』が出版されたのであるが，そこには例のメチルドを彼に招介したと言われるエルメスヴィスコンチイの対話からの長い借用や『エディンバラ』誌やミラノ時代のサロン知識が読まれる。この小冊子はフランスでは殆んど無視された。たゞ，イギリスの二，三の雑誌が賛辞を表明したにすぎなかった。従って，此の時期のフランスにおける浪漫派にはなんら影響をもたなかったのである。今度はスタンダールの日常生活に戻ってみよう。すなわち，サロン生活に彼の姿を眺めることになる。クラーク嬢のサロンで彼は画家の妻であるベロック夫人と面識があったが，彼は夫人の崇高な容貌にたいへん心を惹かれたというのであるが，それというのも夫人は彼がミラノで初対面し，続けて交際しているかのバイロンに驚くほどそっくりであったとされている。そして，たまたまこの夫人は運命の偶然かあの偉大な詩人に就いて一書をものにしたいと願っていたのである。当時，フランスでスタンダールほどバイロンに就いて語る資格のある男はまれであったと思われるが，夫人は彼からバイロンに関するあらゆる記憶の糸をたぐった後，著作にさらに光彩を放つが如くスタンダール自身からバイロンに対する回想に満ちた長文の書簡を受けとり挿入することができた。一方，スタンダールはベロック夫人がクラーク嬢の鋭い優しさのない才智とはまったく対照的な優しい感受性の持主である点は認めていた。そこで，夫人が仕事を完成したときバイロンの把握の仕方において人

間と詩人とを混同していると批難したとしても，そこにはデリケートであると同時に高揚する魂の発露があることを認めていたのである。彼はこうした夫人との交際後も王政復古下を通じて機会あるごとに会っていたと思われるが，夫人に作家を認めるよりもむしろ美女の特権に惹かれてのことである。クラーク嬢のサロンと同程度に訪問する今一つのサロンがあった。『イタリア絵画史』をスタンダールが送呈したことが直接その人と面識をうることになって出入していたトラシー伯のサロンである。しかし，数年を径た此の頃ではトラシー伯は以前と同じ親切さでスタンダールと交際していなかったようである。その原因は三つばかり教えられている。その一つはトラシー伯のおかげで出入りを許されたと思われるカバニス未亡人（伯は哲学者カバニスの妻として非常に尊敬していたと言われる。）のサロンにスタンダールが背を向けてしまったこと。今一つは彼の『イタリア絵画史』に感服したこの哲学者も彼の『恋愛論』にはもう自分の弟子の資格を認めなかったこと。最後の理由として，前の二つより，より人間的なことであるが，彼がジャコバン的言動を弄して小心なひとびとを怖れさせて得意になっている態度が謹言なトラシー伯の癪にさわったものとみられている。そうした伯の冷遇にもかかわらずスタンダールは終生トラシー伯に覚えた尊敬を失うことはなかった。『アンリ・ブリュラールの生涯』の第二十三章で，彼が中央学校時代を回想したなかで〈我が生徒らよ，コンディヤックの論理を学べ，それは全て皆の基礎である。〉と，デュピュイ先生は述べたと伝えているが，私はこの文章のコンディヤックの名をトラシー伯の名に換えればスタンダールの伯に対する尊敬が満たされていると思う。要するにスタンダールはその時代の哲学者のなかの最大の人として評価していたのである。これほどトラシー伯に私淑する彼が伯から嫌われることは，多分，此の時代にたびたび訪問し面識のあったパスタ夫人に対してもそうであったように彼の性格が最上の理由となっていよう。スタンダールはその人の自分への信頼が確実なものであると思うと，彼は面倒な役にもたたない虚礼や心配りを相手にとらなくなる。すなわち，

親しき仲間にも礼儀ありなどは彼の目には不誠実な人間同士の偽善に映る。彼って，彼の態度は誠実のみを示す情熱に溢れるようになる。小心なトラシー伯はこうした彼の態度になにか執念といったものを感じとったのではないかと思う。しかし，彼の妻が存命中はともあれスタンダールはこのサロンの常連ではあった。と言うのも夫人は誠実な性格で情熱的なひとびとを好んでいた。そして，夫人はスタンダールの『ローマ，ナポリ，及び，フロレンス』を心から称賛していて彼女の愛読書のなかでもウオルター・スコットの小説と同程度にその本は読みかえされて傷んでいたと伝えられている。しかし，1824年12月25日に夫人が亡くなった時，彼の足は自然とそのサロンから遠ざかっていた。スタンダールが上述の如くイギリスの雑誌にしばしば通信を企てていた時期に『イタリア絵画史』，『ハイドン，及び，モーツアルトに関する書簡』，そして，『ロッシーニ伝』の作者である彼はパリで文学放浪児の生活を送っていたのである。スタンダールの出入りしているサロンの連中は彼が自分はミラノでロッシーニばかりか，老大家マイエル，新進のバッチーニなどと音楽論争をやったものだと喋っているのを耳にした。それで，彼はフランス音楽を売りものにしているフェイドオー劇場を敬遠して，もっぱらイタリア人が歌っているルゥヴワ劇場の常連となっていた。演劇に就いては，パリ紙にイタリア王立劇場の上演記事をその廃刊まで，すなわち，1824年9月9日から1827年6月8日まで掲載している。この仕事をすることになったスタンダールが一つの条件を持ち出していたことを知っておく必要があろう。その条件とはあまりにも偽るような記事を求めてくれるなということであった。此の時代に彼が次の諸雑誌に記事を機会あるごとに送ることも注意すべきであろう。(すなわち，メルキュール・ド・フランス，クーリィエ・フランセ，グローブ，ナシィオナル，タン誌などである。)此の年代における彼の生活状態を調べてみると，1,600フランの終身年金と900フランの軍事年金，さらにイギリスの出版者コルバーン氏から数年にわたって5,000フランを得ていたし，1823年と1824年には『ロッシーニ伝』のフランス版，及び，イギ

リス版からの収入，そして，1826年には『ローマ，ナポリ，フロレンス』の第二版までの収入などを合計してみると，1823年，及び，1824年には 5,000フランから 7,000フランを使うことができたし，さらに次の二年間には 8,000フランから10,000フラン使う身分であった。だから彼はこれらの四年間はパリでエレガントな生活を暮したわけである。勿論，旅行趣味も大いに発輝している。すなわち，国内を始めとしてイタリア，イギリス，及び，スペインにまで足跡をしるしたのもこの時代である。そして，彼は社交界で暮すだけの費用もまかないうるその時期，細心の心遣いで我が身を若者の如く着かざるダンディさを身につけていた。例えば，祖父のように残っている自分の毛髪との調和を考えて黒髪ではなく栗色の偽前髪をつけていたという。その頃，スタンダールを知ったサント・ブーヴは彼の顔立を〈薄い唇を少しつき出し，恰も人を小ばかにしている。目はかなり小さい。〉などと容叙なく描写している。それで，ひとびとは彼にメフィストフェレスなる仇名を奉った。本人は怒るどころかむしろこの名に名誉を覚えて嬉しがったという。事実，絶えず薄い唇に冷笑を浮べて皮肉な言葉を弄して得意気にしていたと言われる。われわれがすでにみたあのメチルドに対したときの彼の自然の姿はこのような悪魔に応わしい面相と変貌したと言えるであろうか。しかし，彼が恋をするとわれわれは自然な姿のスタンダールと再会して思わず懐しさを覚える。彼の次のヒロインとなるクレマンチーヌは彼のこの自然な姿を見抜いてもいた。スタンダールに宛てた手紙の一節で彼女は，〈あなたはある時には優しさと思いやりとを持っていらっしゃる。〉と書いた。

時勢も自身の生活条件もすべてが彼には好都合この上なしの時期に，メチルドから受けた心の傷は除々に痛みを減じていったのである。しかしながらこの苦痛が全治していない筈なのに，われわれはスタンダールが嵐の如き情熱に溺れてゆくのを1824年にはもう予告されるのである。彼はナポレオン時代の最後の数年をブーニョ伯爵夫人のサロンで常連となっていた。そこで彼は1788に生れている伯爵夫人の娘クレマンチーヌとしばしば会っていた筈で

ある。彼女は22か23才でキュリアル男爵と結婚している。だが，不思議なことにスタンダールが始めて日記に彼女に就いて記したのは，1814年7月4日イタリアに出発する夜のことである。フランス軍の情報を知るために彼女の母の許を訪ずれたとき，彼は素足の男爵夫人と偶然会ったとされている。それから8年の後，スタンダールがフランスに帰った際に，彼はその母親のサロンで女盛りの彼女と再会する。そして，彼は落ち着いてくると，メチルドを想い，涙を流しながら『恋愛論』の完成を彼が私淑するルソーが仕事をしたモンモラシーで急いだことは上述したところである。それで，この辛らい仕事を終った彼は孤独に堪えられなくなりサロンに戻る。一方，クレマンチーヌはスタンダールの一切を知っていながらも進んで彼に愛を示した。と言うのも彼女は彼が，1811年当時，もっとも静かに愛を示して6年にわたる自分の気持を告白した相手であったダリュ伯爵夫人の親友であったのである。1824年，クレマンチーヌの恨みごとを綴ったスタンダール宛の手紙の一節は〈あなたは私の求愛を2年ものあいだ冷淡に無視された。〉と，彼女自身が1822年，23年の自分の心を告白している言葉が残っている。メチルドに苦杯をなめた彼は女の誠実さを疑い続けていたのであろう。1823年の7月に彼はクレマンチーヌ邸で数日を過している。彼女の邸はモンシー・ユミエールにあった。当時，ピレネー軍団の第五連隊長であった。キュリアル男爵は夫としても妻に軍人ぶりを示し粗暴でクレマンチールを泣かすことしばしばであった。その邸でスタンダールは彼女と2人だけで時間をすごしても彼は相変らず彼女を懐疑の眼差で眺め，口数も少なく愛の片鱗すら見せることを恐れていた。滑稽者にされることの恐怖の念が片時も脳裏を去らなかったのである。相手を滑稽にすることがうまく，その愚かしさを嘲笑する彼はそれだけに自分がその被害者となることに絶えず恐怖を感じていたのであろう。数ヶ月後，イタリア旅行に出ていたスタンダールはローマからクレマンチーヌに淋しさを訴え始めている。〈老いた兆候なのでしょうか，私は友情の必要を感じて居ります。他の望みは適えられないのでしょうから，友情だけが私にパリの霧

を懐しくさせるので御座居ます。〉と。そして，イタリアから帰った彼は彼女の許に姿を見せる。5月初旬，マンチ（クレマンチーヌを親しく呼ぶとき，彼はそう呼んでいた）に対する最初の愛の気持が彼の心に宿ったとき，丁度，『ラシーヌとシェイクスピア』の第二部を執筆し始めていた。アンディリーの森を散歩していた際にマンチの求愛に答えようと決心して，どのように彼女に愛を告白しようかとチャンスを狙っていた。マンチはとうとう係蹄にかかったと嘲笑するかもしれないからたいへん勇気がいる。だがこうした心理状態の持続はそうしなければならないという義務意識を発生させる。〈あの木まで歩み進んだとき，告げなければ私は卑劣漢にすぎない。〉と，スタンダールは自分に云い聞かせていた筈である。われわれはこの作家の姿を見て，ジュリアンを思い出すであろう。自分の臆病ぶりに参り，若しレナール夫人の手を取れなかったら，俺は死刑に価する男であると，10時の鳴るのが合図と時間読みをする。むしろ，ぶっ倒れなかったのが不思議な位，傷ましい場面を思い浮べる。クレマンチーヌはスタンダールを誠実に恋していた。だから千秋の思いで彼の告白を待っていたのである。此の日，互に愛の囁きがあったにちがいない。時にスタンダールは41才であり，クレマンチーヌは36才であった。5月18日，われわれは遂に彼がマンチに宛てた次の手紙に両人の密会を読むことになる。〈いつ私はあなたにお目にかかれるのでしょう。あらためてお宅へいつ伺ったらいいのでしょう。……どうか手紙であなたがお独りでいらっしゃる確実な時間を知らせて下さい。……〉彼女は4，5日でモンシーへゆく筈であった。心地よい季節を田舎で暮すことが一般貴族の習慣であったからである。スタンダールのこの一緒に居たい不安な気持をクレマンチーヌもまったく同時に感じている。彼女は20日に彼に答えている。〈ね，あなた，ほんの10分でも月曜までにお会いできないものでしょうか，（ジュ・テーム）というお言葉をお聞きしないで田舎へゆくなんてほんとに堪えられません。5月22日に両人は結ばれたものの，彼はメチルドへの追憶を消すためにかますます激しくマンチへ惹かれてゆく。スタンダールが見た彼女に対

する人間像の批評は彼が愛した女たちのなかでもっとも奇智の冴えた女であるという一語に尽きる。しかし，われわれはクレマンチーヌが恋を恋する情熱的恋愛を望んだがために彼女の性格がもっともロマネスクなものであった気がする。愛の激しさにもかかわらず，スタンダールは今一人の自己が目覚めてゆくのを感じ始めねばならなかった。この第二格のスタンダールはやがて第一格に迫るのである。従って，一方では情事に耽溺しながら，他方ではそうした自己を相手の女性を冷静に観察するのである。クレマンチーヌは始めは本能で，やがては意識してスタンダールの作家の目を知った筈である。そこで，彼女は狂気じみた争いを売ってみたくなる。〈あなたが私に与えた悲しみをなんとかかんとか言ってもお楽しみになっておいでなら，まだ，私は救われると思わなければならないでしょうね。でも，あなたはなんという恐ろしい状態に私を引きずり込んだのでしょう。私はもう自分が分らなくなっているので御座居ます。あなたに望みを持てるのでしょうか。……そうですわ，アンリ，あなたは悪いお方，あなたは私の肉体しか愛していないのですわね。此の一ヶ月あなたは私に執ってたいへん恐ろしいお方になってしまったのですわ。なぜですの，きっと私が弱みを告白してしまったからですのね。幾多の愛人を持ったあなたが彼女たちをふってしまったように，私にひどく振舞う権利がおありですの。愛している人を恥知らずの，そして，安心して身をゆだねた人を野蛮の思いやりに欠けるのと考えるなんて堪えられません。……あゝ，私が愛している人が肥えてみえるので，気立の善良なお方と思いこんでしまったとは残念ですわ。……私を愛する。と，口ではおっしゃいましたわね。でも，アンリ，一体，どこにその保証があると言えますの。かって私に逢うとなさったことが一度でもありましたか。相変らず私を避けていらっしゃったのじゃ御座居ません。二年間も私の告白を避けたのでしょう。私がうちあけたと思ったら一週間後にはもうお払い箱になさったのね。胸に短剣を突き刺すのが面白かっただけなのでしょう。でも，ともかく，あなたを愛していますわ。あなたをね。》

約20年前，メラニーがスタンダールに宛てた1806年6月10日の手紙にあった如く，作家としての自己認識完成の願望は行為の集積からなる自己存在に対する批評眼をいつしかすでに（1800年に始まると思うが,）完成したのであろう。当人自身もこうした自己の姿を熟知していて今さら自分が変貌なんかできない程，性格に深い支配力を与えていることを悟っていた。クレマンチーヌのこうした恨みに満ちた手紙の返事にも自己のこうした姿を告白している。

《私に就いては，少しも，不安を起さないで下さい。私は深くあなたを愛しています。それにこの私の恋は今まであなたが社交界や小説で知った恋とは，多分，比べものにならないでしょう。あなたがこの世で知っている心のこもった恋に比べうるものと存じます。……私の風変りはどうにもならない。だが，そのためにあなたが私の愛情を誤解するなんてことがあってもよいものでしょうか。(1824年)》

此の年の7月，今度はスタンダールがモンシーに滞在しているマンチと密会する。それで，この密会が『赤と黒』における第一部二十三章のジュリアンとレナール夫人との密会のモデルであるとは誰と名を挙げるまでもなくスタンダール研究家の一致した見解である。

《レナール夫人は化石したようになって，返事もできなかった。私ほどこんなに悲しい目にあった女は居ないと思いますわ。……死ねたら嬉しい……胸のところが段々冷たくなってきそうよ。……」夫人からはこれ以上に長い言葉を聞くことができなかった。夜明けが近づいてきて，どうしても出てゆくより仕方がなくなった時にはレナール夫人の涙はぴたりと止まった。夫人はジュリアンが黙って綱を窓のところに縛りつけているのを見ながら接吻することも忘れていた。……ジュリアンはこの生きた屍の生気の通っていないような接吻を受けて言いようもない気持にうたれてしまった。数里をゆくあいだ，他のことは考えられなかった。彼の心は悲しかった。そして，山を越えてしまうまで，ヴェリエールの教会の鐘堂が見える限りは幾度もうしろを振

り返って見た。》

言わばスタンダールとクレマンチーヌはこのようにしてお互に自分たちが心から愛しあっていることを，世間の噂になるであろう不用意な密会によって，自分たちを悩ましたお互いの疑惑を他へ転じてしまったのである。今，マンチは愛人を信じきっている。

《私はあなただけと幾月も暮したい。そうしたら，私は身も心もすっかり捧げ尽くしてしまうでしょう。その時こそ激しく愛されていると信じこんでしまいますわ。……今になって，私はあなたが不能者だなんて思ったとき，あなたは余りにも高尚だったのだと納得していますの。でも，その時，あなたは何んというまずい方法で可愛がられるのかと思って居ましたの。》

マンチのこのような虚飾のない告白が彼の情火を一瞬に燃えあがらせたと見える。スタンダールの女に与えた手紙のなかで次の手紙くらい情熱をそのまゝ表現しているものはかってない。

《続けて三日お会いしてみると，益々あなたが好きになるような気がします。若し一週間続けて一緒に居たら，そして，お互いの心臓が同じ激しさで打ち続けるなら，しまいにはお互いに離れられなくなってしまうのではないかと思います。》

だが，彼以上にクレマンチーヌの手紙は1824年から26年までに215通を数え，平均して週に四通くらいになっているのに対してスタンダールの手紙は彼女が夫への用心から隠蔽することがあったとしても現存するのは僅かに数通しかない。そうしたスタンダールであっても彼の恋愛歴のなかでこのマンチとの二年間にわたる恋愛は心のハムレット的相剋と逡巡の後にふみ切った意識的なものであっただけに挑戦的であり，両者ともそれぞれ全力を尽して自らを渦中に巻きこんだ形跡が双方の書簡に火花をちらしている。アベル・ボナールの『スタンダールの恋愛生活』によると，

《これは恐らくベールの最大の恋愛であったにちがいない。両人の性質が似ていたからでもあろうし，また，単にベールが老年期に入りかけてもいた

からである。つまり，われわれが始めて恋をする場合でも，これが最後の恋ではないかと思う場合でも，この恋愛に全身的な愛情を賭けようとするからである。》

と，述べているが，この決闘しあっているような両者を今一度捉えてみよう。先に引用したマンチの手紙に次の如き穏かでない言葉が数々読める。

《あなたを可愛がっていらしたあの亡くなったアレク（サンドリーヌ）さん以上に求めることはできないの，あの方が苦しみ始めると，あなたはさっさと棄てておしまいになりましたね。……アンリ，私を殺すにしてももう一週間待って頂けませんでしたの。……若し私が妊娠したとしても御存知の通り覚悟はできて居ります。覚悟は決して揺ぎませんわ。……アンリ，さっさとロジューヌ（歌姫パスタ夫人）の所へいらっしゃるがいゝわ。私，あの人が大嫌いよ。えゝ，早くいらしてあの女に抱かれるがいゝわ。》

このマンチの手紙に妊娠という文字が読まれるが，この行からの以下三行は彼女の涙で滲んでいたと言われている。こうした手紙が現存していたせいか，キュリアル家の子孫にスタンダールの血統が混っているのではないかという噂が先年流れ，キュリアル家の当主の否定の談話が新聞紙上に掲載されたことがあった。さて，本筋に戻すと，勿論，スタンダールが直接かっての自分の恋人たちのことをマンチに告白したとは思われないが，さりとて積極的に否定したとは思われない。此の当時，彼の友人たちすらもパスタ夫人と彼の関係を疑っていた程である。彼自身はかっての歌姫ビガノに接したと同じく甘美なメロディとパスタ夫人の周辺に漂うイタリア的雰囲気に酔っていたのであろう。このサロンではイタリアの消息が話題となり，スタンダールに執って懐しい人々の名前も聞かれたことであろう。かっての彼の恋人アンヂェラは数年前オペラ歌手となっていた。従って，彼は彼女の名前が出る毎に苦い追憶に浸ったであろう。一方，このサロンに出入りすることで恋の作戦からもてる男，ドン・ファンの仮面を被ったと見える。マンチもこの相手の態度に負けていなかった。

《私が自分の落度を（前に愛人があったこと）あなたに告白したからですわ。でも，あなたはこれまでに沢山の女性と関係なさったではありませんか。》

勿論，スタンダールもそうしたマンチの非難をやり返している。

《あなたの馬車から受ける人生観。》と，

双方が自虐の犠牲ともいうべき罠に落ち入り，私にはこれ以上何もうしろめたいことは御座居ません。と，相手に告白しあう。かゝる結果，相手を嫉妬から傷つけ，そうした打算から自分も自分のしかけた策略に苦るしむという不自然な様相が当初両人の心を捉えていったと思われる。従って，彼等の恋愛は意識的陶酔なのであり，つとに両人とも自分たちの心理状態を見抜いていたと見える。どちらかと言えばスタンダールの方がこうした不自然さに堪えられなくなったようである。すなわち，彼は次の如く言っている。

《親密の度を重ねた三日間のデートの後では，われわれのどちらももうお互いの過失に固執しますまい。そして，愛することと幸福になることだけを考えましょう。》

やがて，スタンダールが危険を承知で密会の場に赴むくとしても，マンチはキュリアル家の習慣を無視してまでも恋人のために尽す我儘は許るされなかったし，スタンダールにしてみてもマンチの奴隷の役だけで満足をかこっている筈はなく従来通りボヘミアンの生活に耽溺していた。そして，彼は大ぴらに娼婦たちとも夜をすごし平然とかまえていた。だいたいマンチはあまり健康にすぐれず，実のところ彼の過度の欲求に参っていた。

《私は肉体的には愛人を欲しいと思いませんわ。だって，私の健康に執ってたいへん危険ですもの。それでも愛されることを願いそうして頂きたいのですわ。》

それで，結局，代理女を許す破目になっていたが，それをいゝ口実にスタンダールはこれ見よがしに遊びまわった。さすがにマンチもとうとう癇癪を起したとみえて咎め始めた。ともあれ，両人の関係にひびが入ったのは1826年を迎えてまもない頃であると推測されている。3月26日の復活祭にはお互

いに将来の破綻を知りつゝも惰性に引かれてか逢っている。しかし，その日は消える一瞬に明るく燃える炎のような両人の激しさがあった。二人は自分たちが今では恋愛劇を演じたことを認めざるを得なかった。5月末にはマンチは彼をもう愛してはいなかった。そこで，スタンダールは彼女の心をひき戻すためにもっとも有効な戦術を用いて，数週間，パリを離れる決心をしてイギリスに渡っている。一方，マンチにはル・パ・ドゥ・カレにいる夫の許にゆかざるを得ない司令官の妻としての義務が待っていたのである。キュリアル将軍は1826年の初頭にサントメール設堡陣地の司令官に任ぜられてその地に着任していた筈である。その年の6月に宗教，軍事の諸儀式が開催され，町はお祭り気分に沸立っていた。続いて8月8日の二ヶ月にわたる大演習があり，その演習が終了した時点で町の上流階級の人々や部下の婦人たちのために祝賀会が開催されたのであるが，こうした式典に司令官夫人が欠席することは前代未聞のことであった。それで，クレマンチーヌは6月頃から9月にかけてこの町に滞在していたと推定されるのである。

1826年頃の文学界はどのような動向を見せていたのかを見届けたいと思う。マンチを失ったスタンダールには恋愛の代償が必要となる。彼は9月から10月にかけて始めて小説を執筆している。その小説は1827年8月にウルバン・キャネルから三冊本として無著名のまゝ出版された。〈1827年に於けるパリのあるサロン情景〉なる副題のある『アルマンス』がそれである。その頃，漸く浪漫主義に関する議論がサロンを本格的に賑やかにしていた。当然，スタンダールはその議論にたいへん興味を示したが，同時にデュラス公爵夫人やシャトウブリアンの小説などがサロンの話題をさらっていた。この女流作家は『ウーリカ』（1824年）や『エドウァール』（1825年）で黒人の娘と良家の青年との結婚とか平民と貴婦人との結婚といったおよそ現実社会ではありえない世界を描いていた。そして，1825年に『オリヴィエ』または『秘密』なる小説を執筆したが出版はしなかった。けれども，当時の作家の慣習からどこかのサロンで朗読されたものとみえる。略筋は生理的不具者ゆえにオリ

ヴィエが愛する女性から遠ざかるというものであってスタンダールもテーマをかえていない。こうした異常なテーマは文壇やサロンの話題となり，時の諷刺作家ラ・トウーシュという目先の利く男がデュラス公爵夫人の小説と題も筋も酷似している『オリヴィエ』を1825年から翌年にかけて夫人の二作と同じ出版者から本も同型のしかも無著名で出版してしまった。そこで，誰の作かが大いに問題となり，ラ・トウジュ自身が止むなく自作でもなければ夫人のものでもないと弁明している。『恋愛論』でこうしたテーマをカバニスの理論を借りて研究したスタンダールはこの小説に少なからぬ興味を覚えたにちがいない。彼自身1826年当初，すでにこのテーマで執筆し始めていたらしい。しかし，クレマンチーヌとの愛の急変が執筆時間を彼から奪ってしまった。遂に8月，破綻を招ねくと再び執筆に戻り9月，10月と創作に精をだし彼の『オリヴィエ』を完成したのである。そして，彼はメリメに原稿を送って批評を仰いでいる。そこで，メリメもその労をとり批評した。その批評に彼は12月23日付の書簡で答えている。

《世間にはわれわれが想像している以上にオリヴィエが多い。君が月曜日に逢う女もオリヴィエを持っている。故ロ・ラゲェイ公爵作の『ブランカ公爵夫人の手記』と称する気の利いた小冊子にも（君がマレストからそれを借用されたらと思う。）大臣のドゥ・モールパ氏とシャトオルウ公爵夫人の最初の夫であるラ・トウルネル侯爵という二人のオリヴィエが読まれる。さらに私はウォルター・スコットの『小説家列伝』を読んでスキフトもこの仲間であることを知った。私がオリヴィエという名を選択したのは私自身がその名前を考えたのではなくそゝのかされたのが原因なのです。私はこの名に執着します。と言うのもこの名のみで説明に，それも猥りがましい説明になるからです。若しエドモンとかポールとすれば多くの人はバビラニスムという事実を見抜けないと思う。（モープラ氏の場合はバビラニスムはイタリア語である。）私はオリヴィエのために彼を画くことに興味を覚える。……》

と，スタンダールはかなり身勝手な見解のまゝ翌年の7月に『アルマンス』

という表題で強引に出版したが，読者の無理解にあってその出版は散々の不首尾に終った。1828年6月6日に稿本に忿懣をぶちあけて筋書きくらいは分ってくれてもいゝのじゃないかと嘆いている。

《流行にあわないというので俗人は私の小説に結晶作用も起さなければ実際にそれを感じもしない。俗人にはおあいにくさまという次第。例えばこの小説は『クレーヴの奥方』とか，タンサン夫人の小説などのような本当に古風な作品に類似しているのですが，如何に流行というもののためにこの小説が理解できないとしても，このプランほど単純なものがあろうか，主人公は自分が不能者であると感じるから困惑し苛だつが，これは彼が遊里に友だちと，次は唯一人で出かけて行って確かめたことである。この不幸のために女の風情をそば近く眺めるような時にも彼の理性は失われる。二百万フランが手に入る。一，何ごとも心から話しかけている唯一人の女から軽蔑されていると思う。二，女の尊敬をとり戻そうとする。こうした状況は彼が恋をし，また，それなしに恋心を起させるために必要である。彼が律儀な男であり，また，私が彼を愚物に創作していないのだから必須の条件である。三，ある事情から彼は自分が愛していることを知る。その上，私はこの事情を風情のあるものとした。それは愛すべき狂気じみたオコール伯爵夫人の振舞である。四，彼は彼女に話しかけたいと思う。五，決闘における負傷のためにそれを妨げられる。六，死期の近いことを知り，彼女に恋を告白する。七，偶然に助けられるが彼女の愛人は決して彼女に結婚を求めないと約束させる。八，彼女は彼のために若し彼が彼女と結婚しなければ面目を失うような過失を犯す。九，彼は自分にルイ18世やモールパ氏やラ・トウールネル氏の如き生理的欠陥のあることを告白しようと決心する。十，一通の手紙のために義務は果されない。十一，彼は結婚しそれから自殺する。明言すればこのプランは少なくとも批難さるべきものではないと思う。》

しかし，結局は各章の引用句を集めてくれ，あわせて小説作法の助言をしてくれたメリメは別としてスタンダールの他の友人たちすら余りこの作品に

好意を示さなかった。サント・ブーヴは《此の小説は根本的には謎に包まれ，詳細な点では真実を含まず如何なる創意も才能も示していない。》と，酷評している。しかしながらこの『アルマンス』を受け入れなかったフランス文学会も直面する争点が演劇理論に集中する時，スタンダールがミラノで洗礼を受けた浪漫主義を双手を挙げて歓迎する事態が1824年頃から起っていたのである。1823年の3月に先述した状況のもとでスタンダールの『ラシーヌとシェイクスピア』が出版されて四ヶ月後，例の「良き文学の会」の機関紙である『ミューズ・フランセ』が創刊されたのであるが，最初の数号は御用誌の役を何ごともなく果していた。しかし，1824年の1月号にギロオが〈我らの主義〉を発表して，古典の模倣を排して美には絶体美ばかりでなく，相対美をも認めるべきであると宣言した。続いて4月号で今度はノディエが新しい文学の必要を主張した。しかし，両者とも穏和な浪漫主義を控目に述べたにすぎなかった。ところが彼等の思惑を超えた反響を呼び浪漫主義を標榜する作家たちはこぞって賛成の拍手を送ったのである。そこで，御用批評家，アカデミー，大学，及び，教会は自らの陣営の反逆に驚き，もはやこうした浪漫派を支持しないで今日の友は明日の敵とばかり打倒しようとした。すなわち，ウルトラ係の新聞や雑誌は突然態度を急変し，浪漫派は善良なカトリック教徒でなく異端であり〈文学のプロテスタント〉であると，断定したのである。かくして，時のウルトラ系権力者の要求に従順であったアカデミーは発言を迫られる。そこで王の帰国記念日である4月24日の公式集会で国民的文学伝統の名目で反浪漫主義の立場にたつことを宣言したのである。すなわち，ウルトラのオージェが声明したのであるが，彼は浪漫主義を二つに区別し，ドイツ浪漫主義とゴール的浪漫主義と看做し，〈文学上の革新としてみたドイツ浪漫主義は演劇的一問題に他ならない。〉と，そして，シェイクスピア，ローベ・デ・ベカ，ゲーテ，スタール夫人を認めず，この浪漫主義はまだ理論の領域をでずそれを判断することができる如き作品は一つとして舞台に登場していないから，これを真面目に論考するわけにはゆかないとかたず

けている。今一つのゴール的浪漫主義は〈雑種の浪漫主義でゲルマンの浪漫主義と同じく力量も勇気も口実も持合せていない。……たゞ感動させようと欲するのみであり，それが捉えるのは魂の詩である。〉と，断定して，真の理想も規則もなく定まった意図もない。浪漫主義は，それゆえ，文学的創造方式としては何ものでない。と言うよりはむしろ，浪漫主義自体が存在しない。現実の生命を持たない。〉と，攻撃した。そして，その目標とされたのは『ミューズ・フランセ』であった。しかるにこの雑誌の中心的活動をしていたスウメが7月にアカデミーに選出されると，彼は浪漫主義放棄を宣誓してしまい，事実上，この雑誌は骨抜きにされて7月号で廃刊された。続いて今度は大学が浪漫主義に追い打ちをかけるが，それは教会と道徳の名においてである。1824年8月16日，枢機会，及び，ウルトラ派の最有力者であり，フランスにエスイタ教徒を帰国させようと尽力しているもっとも保守的な勢力の代表者であるばかりかエルモポリの司祭であり，アカデミーの会員で大学総長フレーシヌウ伯が簡潔な演説をなして，浪漫主義をたゞ悪趣味と邪悪な教義と論じて排斥している。このようなウルトラ系の攻撃に対して，勿論，浪漫派も応戦して1824年から1825年にかけて陣営を築き，そのなかでも1824年9月15日に創刊号を出した『グローブ』誌は最も強力であった。こゝに至って古典主義対浪漫主義は明らかに保守主義対自由主義という政治上の争いになったのである。1823年の末に為政者たちはイスパニヤ戦役の勝利に自信を得て議会を解散させて，選挙にかってない弾圧を加えた。その結果ウルトラ一派は完全勝利を占めている。すなわち，自由派は，430議席のうち僅かに13議席を確保しただけであった。為政者のウルトラ一派はこの新勢力を利用して大革命前の王権復活を謀り，出版上の起訴裁判などが相次ぎ，刊行物の押収は日毎に増し，演劇の検閲は一段と厳しくなり，かってスタンダールがミラノで体験したような浪漫主義の性格が形成される状況が出現したのである。従って，『グローブ』誌に多くの知人を得て，スタンダールは今こそ自分の体験した浪漫主義が彼等にも理解される段階にきていることを悟ったのであ

る。それで，彼は1823年の『ラシーヌとシェイクスピア』の下巻とも見るべき『ラシーヌとシェイクスピア第二』を書き出している。この執筆の直接の動機となったのはアカデミーの浪漫主義に対する宣言に答えるためであると，マレスト男爵に宛てた1824年4月26日付の書簡で述べている。〈……アカデミー・フランセーズは浪漫主義に対して宣言を投げつけたばかりです。……私は浪漫主義に反対するオージェ氏の宣言に就いて返書を貴下に提出したいと思う者です。パリ中のひとびとがアカデミーによってなされた攻撃を噂している。貴下がよく御存知の我が友『ロッシーニ伝』，及び，『ラシーヌとシェイクスピア』の作者であるド・スタンダール氏はオージェ氏に答えたという。この返書は三日後に貴下に渡される筈である。……〉

結局，『ラシーヌとシェイクスピア第二』は1824年4月から翌年3月初めにかけてやっと書きあげられた。スタンダールは完成すると当時頻繁に出入りしていたドレクリューズのサロンで読んで好評を拍し，『グローブ』の若い連中から大いに激励された。そこでスタンダールはこうした好条件に力を得て1825年3月上旬に23年ものも揃えて出版したのであった。今度はイギリスでは余り取りあげられなかったが，逆に国内では相当の反響を呼んだのである。種々の新聞，雑誌に真面目に論議されていた。殊に『グローブ』誌は〈歴史的な自由な悲劇〉の問題を執拗に取りあげて論じた。以後，三，四年にわたって文学会の問題は殆んどこのスタンダールが提出した教義に集中された様相を呈した。1827年には先年排撃された例のイギリスの一座がパリで公演し，今度は熱心な観客を見出していた。おそまきながらこうした風潮に刺激されてコメディ・フランセーズでもシェイクスピアものを上演している。スタンダールが理想とした散文で書かれ規則に煩わされない歴史的場面が大いに人気を拍することになったのである。1825年にはメリメの『クララ・ガジュール』も刊行されている。演劇は大胆となり野心的になっていった。アンリ・マルチノの要約によると，スタンダールの演劇理論が散文を用いて国民的題材をテーマとし三統一の法則を無視した三点よりなると看做している。

しかし，フランス浪漫派の主力は韻律を重んじる詩人たちであったから彼等の劇が散文で書かれるとは考えられないことであった。こうしたフランス浪漫派の気持が1827年に発表されたユゴーの『クロンウェルの序』となって代弁されている。彼が主張するところは〈演劇が芸術であるためには韻文で語られる必要がある。〉と言うにある。1828年になると，『グローブ』誌も遂に愛国的精神からか，ユゴーの演劇論支持に走ったのである。このような浪漫主義の推移を眺めて育ての親であるスタンダールはもはやその子に裏切られたことを認識して極く自然に背を向けていったのである。そして，彼は今は文学に関する限り小説に活路を見出したようである。1829年に彼は本格的な小説の執筆に取りかゝる。その年の12月末スタンダールの従弟ロマン・コロンが彼の机の上に『ジュリアン』と題された原稿を見たと証言しているものこそ『赤と黒』の第一部であった。と，伝えられている。ところで私が今問題としたいのは『赤と黒』の第二部執筆の時期におけるスタンダールの恋人がどのような女性であったかを明らかにすることで，彼の1830年代の生活を知ろうというのである。第二点として，その恋人が小説にどのような影響を与えているかもとり扱って見たいと思う。それで，第二部のヒロインであるマチルドのことを問題としたい。今までの研究によると彼女がスタンダールのミラノ時代の第二の恋人メチルド•デンボウスキー伯爵夫人であると看做されてていたのである。アンリ・マルチノも『メチルド物語』の後記に次のように述べている。〈……メチルドは1825年に死んでいるが，ベエールは一生涯彼女を忘れることがなかった。メチルドは彼に執って彼のすべての善き行為を導いてくれる懐しい幻影となった。彼のどんな小説においても読者の共感をもっとも喚起させる女主人公はすべて部分的にメチルドをモデルとして描かれている。……〉このメチルドとスタンダールの関係に就いてはその詳細を前述しておいたが，彼女が第二部のヒロインの座からその失格を宣告されつゝある今日ではどのような女性がその座を要求しているかを明らかにすることが当面の課題となろう。第二部が1830年１月頃に書き始められたとすると，ス

タンダールのその時点での恋人はジューリア・リニエリというイタリア生れの女性しか見当らないのである。ジューリアはトスナカ派遣のパリ駐在公使ベルリンギェーリの姪という名目でパリに滞在していたのである。けれども，実際は血縁の関係はなくて単なる知人にすぎなかった。従って，スタンダールと彼女に就いて語る前にベルリンギェーリと彼女との関係に就いて少し語る必要があろう。この両者の関係はスタンダールに執って，多分，『パルムの僧院』におけるジーナとサンセビリーナ公爵の設定の暗示であったと思える。ジューリアはトスカナの古都シェンナの由緒正しい貴族アントニオ・リニエリ・デ・ロッキの末娘としてスタンダールにおくれること約30年，すなわち，1810年頃に生れている。一方，ベルリンギェーリはすでにジューリアの母アンナのカヴァリェーレになっていたのである。それは中世時代のかの騎士道の名残りで意中の貴婦人を選んで忠誠を誓い，清い思慕の情を捧げるロマネスクな独身の騎士（貴族）を意味したが，19世紀になってもその慣例は守られていたのである。現実の生活では有夫の女が我が身のために清い愛情を示している彼を自分の邸にのみ迎え入れる捉であった。そして，夫と三人で家庭を形成するというよりはサロンを持つことになるわけであった。こうした習慣はフランスの貴族社会でも正常なことであり，むしろ，そうした習慣は貴族の特権意識となり誇りとしていたのであるからジューリアの母アンナの場合もカヴァリェーレを持っていたとしても不思議なことではなく当然であった。殊に，この関係をわれわれはスタンダールとメチルドにも認めることができるのではなかろうか。やがてはジューリアとスタンダールにそうした関係を認めるであろう。スタンダールは作品のなかにもこうした貴族社会を画いている。『リウシアン・ルウヴェン』のナンシィに著るしくそのような習慣を描写して解説してすらいる。ともかく，ベルリンギェーリは独身者にありがちな傾向，すなわち，家庭という暖炉にぬくもりを求めてリニエリ家の一員となったと推察することができよう。その人間像はどうであったろうか，彼は教養も高く，また，たいへんな金持でもあったのでジュー

リアの父も彼を信頼していたと言われている。彼の相手であるアンナが1824年に亡くなっていた。しかし，それ以後も恋しい人の子供たちの良き相談役を，親代りをするようになったらしい。アンナの死後，三年たった1826年にダニエッロ・ベルリンギェーリはトスカナ公使としてパリに赴任する際，問題のジューリアを伴って着任することになったのである。では，どうして実の娘でもないジューリアが公使の姪というふれこみでパリにやってきたのか。このことに就いては小林正著の『スタンダールとその恋人たち』によると，〈なにしろダニエッロは高職にあるし，自分の出であるリニエリ家よりもはるかに金持ちですから，これを頼りにすれば，良い嫁入り口が捜せる。それにダニエッロは自分を養女の様に今の所思っているが，ゆくゆくは私を正式の養女にする。つまり自分は百万長者の跡取り娘になれるだろうという目当があったのです。16才の少女ですが中々利口者です。それにもう一つパリはすでに花の都としてヨーロッパ中の女性の憧憬の対象でしたから，そのパリの誘惑にも打ち勝てる筈がありません。……〉さらに私はこの問題を次のように考えて見たいと思う。丁度,『赤と黒』の第二部執筆を真近にしてスタンダールは軽い創作ものを完成していたのである。その作品は『ミナ・ド・ヴァンゲル』と言い，世に知られたのは1853年８月１日号の『両世界評論』のなかに始めて発表されたときからである。スタンダールの死後約10年が経過しているが，実際，この小品がいつ書かれたかゞ問題となるのであるが，だいたい1829年12月に書き始められ，翌年の１月７日に書きあげられたらしいと，アンリ・マルチノは推定している。この短編の略筋を簡単に触れておこう。ナポレオンがドイツを始めとしてヨーロッパを席巻していた当時，ミナの父ヴァンゲル伯爵はプロシヤの有能な将軍であった。しかし，1814年の対フランス戦役が終る頃，突然，宮廷からも軍職からも去ってしまう。これが小説の序幕をなしていてミナの父の死後，彼女は母を説き伏せて，ジューリア同様，憧れの花のパリへやって来ることになる。どうしてミナがそうしたのかを作者はこう説明している。ミナも年頃になったので，貴族社会の慣例に従

い社交界に出ることになる。ところが，皇帝の副官が早速ミナに惚れ込み求愛し始める。そこは可愛い部下のために皇帝が自ら仲人になって両者を結婚させようとする。一方，ミナはその結婚の結果に思いを馳せ将来の退屈を想像してぞっとして終い，父の死を理由に返事を延すだけ延して揚句の果て早々に故郷を逃げるのであると，作者スタンダールは描写している。1829年の12月にこの小説が完成した頃はすでにスタンダールはジューリアと談笑する仲になっていたので，当時の習慣から執筆しつゝあるこの短編を彼女も含めたサロンで朗読したかもしれないし，あるいは，直接ジューリアにあなたのような娘さんのしかじかの物語を私は今書いていると語ったかもしれない。ではミナの物語はどういう結末を迎えることになるのか，結局，ミナは花のパリに滞在して何を望み何をしたかと言うと，妻のある男に熱烈な恋を試み一時は成功するが，恋路のゆく着くところは相手の情熱の不足を怒って，我が恋の敗亡を認めピストルを自ら頭に当て弾丸をぶち込み自殺してしまうというものである。これでは年端もゆかないジューリアのシェンナで振舞ってしまった。そして，パリへ居住してから辿ることになる運命を示唆したようなものである。ジューリアはきっと彼女の父から何か強制的な結婚を無理に押しつけられて，一時的にはミナの場合のように母の死を楯に延期することができたにせよ，遂に，どうにも言い逃れできないようになって仕方なく亡き母のカヴァリェーレであったベルリンギェーリ公に泣きつき，彼がトスカナの公使としてパリに派遣されるのを此れ幸いと一緒に連れて行ってくれるようにと彼に切願したのでたなかろうか。一方，ダニエッロは独身者と言っても元々宗門の出で老齢でもあったし，ジューリアが幾ら利口者でもベルリンギェーリから見れば孫のようた関係ゆえ，一応，彼女の父も安心してジューリアのパリ行きを許可したのであろう。けれども，それだけでは世間常識は許してくれない。そこでダニエッロは赴任に先立ってトスカナ大公には後見人という漠然とした名目でジューリアを連れてゆく許可を得ている。パリ着任以来，ジューリアを自己の姪として社交界に紹介しておくことにしたの

である。以上がジューリアとベルリンギェーリとの関係であるが，今度はこの二人とスタンダールとの邂逅に移ろう。パリに赴任したベルリンギェーリ公使は博物学者で植物園長でもあったキュヴィエの社交界に出入りすることになった。ところがそこのサロンに彼等三人の運命のいたづらが眺められた。と言うのはスタンダールは1828年，29年と『デュバ』主幹のドレクリーズ氏のサロンで氏が証言しているように自由主義的な傾向の議論によく参加していたが，同時に，このキュヴィエのサロンにも彼のワインは用意されていた。スタンダールは年下の友メリメやイギリス人の知友サトン・シャープなどと一緒にこのサロンの常連であったので，当然，彼はこのサロンに顔を見せたベルリンギェーリと面識を持ち，やがてはジューリアのお相手をするようになった。スタンダールと言えばかのアンヂェラやメチルドのミラノに長く居住し，イタリア事情に他のフランス人などよりもよく通じ，その国と文学，美術，音楽，景観などを自由自在に語ることのできる人であるから，ベルリンギェーリやジューリアに故郷の懐しさを抱かせ，同時に，自分たちの識見を認めてくれるスタンダールとウマがあったと思われる。それゆえ，二人とも親しく口をきく機会があった。さて，問題のジューリアはどんな女性であったろうか。彼女は1830年代の女性美である華奢な身体つきで浪漫主義者たちが好みそうな病的な色の白さを持っていたと言われている。当のスタンダールには彼女はどのように映っていたのであろうか。1833年4月20日の手紙でジューリアにあなたの足の美しさはたまらないと述べている。いわゆる脚線美の持主であったことになる。また，周知のように『アンリ・ブリュラールの生涯』の第二章で彼が愛した女たちを批評しているのであるが，〈ジューリアは始めは一番弱そうに思われるが性格の力では優れていたらしい。〉と，彼女に就いて述べている。そして，このジューリアの才智に就いては彼はこう批評しているように思われる。この場合，『赤と黒』の第二部のマチルドをジューリアと見たてゝのことであるが，このような帰納法に問題があれとしても的確な何かを得る方法として最上であろうと判断して用いること

にする。マチルドを作者スタンダールは批評する。可哀そうにこの娘はありきたりの小説ではものたりなくなって，父にとめられている禁書を盗み読みすると，とにかく，ジューリアがかなりの勉強家であったことを暗示しているのではなかろうか。さらにジュリアンとマチルドがそうであったように，二人は読んだ本をお互に数えあげたり教えあったり批評しあったりしながら庭園を散歩したのであろう。ジューリアがスタンダールに向って愛している素振りを見せ始めるのは1830年の１月21日に始まっている。以後，十八年間にわたる宿命のスタートでもあった。翌々日の23日両人はキュヴィエのサロンで顔をあわせ散会の際ジューリアは進んでスタンダールに私の馬車であなたを送らせて下さいと申しでている。それゆえ，スタンダールは自分が愛してもない娘から奇妙な素行をはっきりと示されてさすがに驚いたらしい。ジュリアンのセリフではないが，「彼女は本気かな」と，心に問うたことであろう。そこで彼は例の如く彼女と自分とを考察してこんなことを書きつけたという。〈恋－1830年２月３日の奇妙な恋の言葉。－「あなたが不器量で年も召していることはずっと前から知っていましたわ。」と，言って彼に接吻する。〉２月６日にはジューリアはスタンダールの召使となる。召使とはマチルドのジュリアンに対する言葉であるが，ジューリアは果してスタンダールにそう誓って変らぬ愛のあかしをたてたのであろうか。この恋愛に就いてスタンダールは覚書のなかで自分がジューリアをものにしたことを47才にして始めて用いることのできた戦法の勝利であると，得意気に記している。さらに彼は次のように見ていると言うよりもうがっているようである。やはり『赤と黒』の第二部なのであるが，マチルドは一介の百姓の小倅であるジュリアンを愛してしまったことを正当立てようとして自尊心との相剋でこんな対話を試みている場面がある。〈「私があの人の口髭の美しさや粋な乗馬姿に迷ったとは誰も言うまい。フランスの前途に対するあの人の高遠な議論，私たちの上にやがてふりかゝってくる事件が1688年のイギリスの革命に似ているかもしれないというあの人の考えに惹かれたのですもの。」〉と，従って，ジュ

ーリアの目に映じている自身の姿をスタンダールはそのように示したのであろう。この点を具体的に述べると，小説にあっては，マチルドは自分の属する貴族階級が革命によってどうなるかと，恐怖を感じてジュリアンの背にダントンを画いている。マチルドはルソーの讃美者でしかも『民約論』の愛読者であり，さらに，ヴォルテールも内緒で読んでいる当時のシンパの如く空想社会主義をも受け入れかねない思想の共鳴者として素描されている。ルソーに関する限りジューリアもどうやらマチルドと同じであった。なぜなら，1836年6月8日の日付のある第三十番目の遺書で，スタンダールが特別に〈ジャン・ジャック・ルソー著の特製本をジューリアに送る。〉と記している以上彼女はルソーを理解していたのであろう。ともあれ，ジューリア自身が告白しているように年取った不器者のスタンダールとなぜ彼女は結婚までする気になったのか，今日ではそこに計算された利害があったとされている。1826年の暮れにジューリアはベルリンギェーリ公使の姪としてパリの社交界に出入りして，それこそ，女王の如く振舞う夢をみていたが，そうした彼女の夢を現実にするためにはベルリンギェーリ公使の経済力が必須の条件であった。それで，かりそめの姪ではなく戸籍上の娘とならねば意味はなかった。しかし，叔父であると名乗った公使は一向ジューリアを正式の養女とする気配はなかった。それどころか，公使の属官を始めとして社交界はいったい姪などと称しているが，実際はあの老人と出来ているのぢゃないのかと噂しだした。スタンダールも1833年の例の4月20日付の手紙でこう疑っている。〈私の心を慰めると思って，色々の点で詳しく話して下さい。第一，ベルリンギェーリ氏があなたの御機嫌を取っていた時，彼の幸福はどの程度までいったのですか…〉と。このような疑惑にジューリアは当にしている叔父さんの財産が自分に入らない場合を考えて自活の道を求める。心から信頼できる男性を捜して自分に服従して貰うこと，そして，万一，この老人と別れるような場合は自分の夫になって貰うこと。なお，彼女は先を計算していた。あらゆる機会に結婚を控えた自分が老人にそうそう仕えることは無理であると，

それとなく公使に分らせながら根気よく彼が自分を正式の養女にしてくれるのを待つことにする。ところが1829年も終らんとしているのに公使の方は一向彼女を正式に養女としない。ジューリアは不安になる。どうにかしなければ自分はパリで孤児になりかねないのであるから，彼女はこのような様々の悪条件のもとで他の娘よりはいっそう早く結婚することで生活の安定を得なければならない境遇にあったのである。こうしたせっぱつまった自分自身の都合からジューリアは急にスタンダールに接近した。彼女にしてみれば彼を荒波のたつ人生航路のブイにしておきたかったのであろう。それゆえ進んで自分から身をまかせたのである。小娘の精一杯の処世術であった。ジューリアのこのような身上を見抜けなかったスタンダールは滑稽にも47才にして始めて幸福狩で獲物を射止めたと己惚れていたのである。

ともかく，1830年の2月4日にたゞならぬ関係となった両人は以後どういう年月を迎えていったのか，その場限りの関係でしかなかったのであろうか。スタンダールはこのジューリアとの関係を誰にも話さなかったらしい。それで，アンヂェラの場合の如くメリメなど彼の友人の側から彼と彼女の恋愛模様を知る手段はない。しかしながら，例の如く新しい恋の相手の嫉妬をかきたてる戦法として，自分とジューリアとの関係を告白している手紙がある。その相手とは少年時代の友でもあったゴーティエ夫人である。1833年の12月にスタンダールは夫人から彼女の作なる『中尉』という題名の小説原稿をあずかり，批評を懇願されていたのであるが，1834年の5月4日に夫人の原稿を読んでしまったこと，さらに一応批評などしたあとで次の文章が含まれた手紙を夫人に出している。

《…私は読み終ったばかりの『中尉』のことで頭が一杯ですが，どのようにしてあなたにこの原稿を送りましょうか，ともかく捜してみましょう。…それからこう反省してみるので御座居ます。祖国や田舎から遠く離れて年をとるのだろうか。実のところ，今の私はたゞ人並にそういう風につぶやいてみるにすぎなせん。私は毎晩19才の公爵夫人の邸で暮して居ります。私から

申せば彼女は恰も便利な長椅子というところです。あゝ，あれ以上のどんなものを持とうと思って居りません。それで，それに首ったけなので何も欲しいと思いません。(この19才の公爵夫人とはジューリアのことである。彼女の結婚のことは後述する。)》

さらに，『アンリ・ブリュラールの生涯』のある章に以下の文があるのを認めたので引用しておく。

《7月の数日，私は喜びで夢中だった。……29日か30日の8時頃であったが，あの美しい太陽と始めて見た三色旗を決して忘れないだろう。そして，その前夜彼の姪が恐がった受勲者のピント邸で宿っていたのである……》

このピントとはベルリンギェーリ公使のことであるから革命を恐がった彼の姪とあるのはジューリアのことである。それゆえ，勝手気儘のサロン的自由主義者であったスタンダールは1880年頃に実現を夢見た自己の政治理想が少しは実現されそうな状況を眺め，しかも夜は革命の騒乱から彼女を守ると称してはジューリアと密会していたのであろうから，まさに，おゝ7月よであったであろう。

此の七月革命の新政府からスタンダールはトリエステ公使の職を頂載することになる。彼はこの光栄をモレ首相とはまったく面識もなかったのに私を公使にするとは怖れいると，幾分興奮気味にアンリ・ブリュラールに語らせている。ともあれ，七月王政の一外交官となったのである。正統派王党，ナポレオン派，及び，共和派の三匹の蝮の咬みあいを眺めるこの政府は王自身が自認していた如く，中庸の一語に尽きる政策をとらざるを得なかった。それで，スタンダールはナポレオンが15年，ブルボンが15年，この政府は果して何年と，『アンリ・ブリュラールの生涯』の終章に感想を洩らしている。此の七月王政をスタンダールが具体的にどう眺めていたかは彼の小説『リュシアン・ルウヴェン』を研究する際に詳述したいと思っている。

かくて，スタンダールは自分もベルリンギェーリ公使の如くフランス派遣のトリエステ公使になったのであるから，ジューリアに対する求婚の好機が

到来したと考えたのである。そこで，公使にジューリアとの結婚の承認を求める。1830年11月6日付の書簡がそれである。

《私の如き貧乏で，それに年とった者がこのようなことを貴下に告白しますことは多分とても向うみずなことで御座居ますが，若し貴下の姪御さんと結婚できますれば，私の生涯の幸福は保証されたものと存じます。……私の財産は本当にたゞ現在の職だけでして47才になります。お嬢さんの財産に関与するには貧乏すぎます。たとえ金持になっても関与致しますまい。47才にして愛され得たということは奇蹟と存じて居ります。姪御さんは貴下と離れることを如何なることが起りましょうとも望みはしますまい。そこで，彼女と一緒に私はトリエステで半年を暮らす。次に貴下と半年を暮すことになります。最初の半年がすぎたら必ず彼女をジュネーヴまでお連れし，そして，半年後に迎えに参りましょう。結婚契約には盲判を押します。若し彼女がお金持になれば生れる子供に送れましょう。そうすれば，障害はなくなります。挙式は1831年5月1日マジュール湖畔のヴァレーズで行われましょう。私は紳士対紳士としてしたゝめました。貴下の傍で生活することを願っている女性と毎年半年は別れて暮すことになるので御座居ます。》

それで，ベルリンギェーリ公使はスタンダールにどういう返事をしたのかというと，何しろジューリアはまだ小娘だから将来あなたとの結婚を後悔するかもしれない。今少し延期するようにと遠廻しに反対している。しかし，この反対理由はあくまでスタンダールのいう紳士としての解答であったであろう。心のなかではあなたがトリエステの公使に任命されたことは事実であるとしても，ドレクリーズなどのサロンで自由主義的言辞を弄して政治を論じられてみえるし，また，いつ革命が始まって七月王政が打倒されるかもしれない。となるとあなたの地位も永続性がない。さらに，あなたは浮彫肖像をどんな人物にお頼みになられたのですか，今度の革命の首謀者の一人であるダウイット・ダンジェにでしょう。と，ベルリンギェーリは言いたかったにちがいない。アラゴンの『スタンダールの光』によると，

《いずれにしても『書簡集』を読むと『ジュリアン』が再び取りあげられる六ヶ月前，1829年7月24日，アンリ・ベールが自分の浮彫肖像を仕上げてくれたばかりのダウィット・ダンジェへ宛てた一通の手紙がある。これは『ジュリアン』がまだ明瞭な形を取っていない時代にスタンダールが1830年の革命の首謀者の一人であるダウィット・ダンジェとかなり進んだ関係にあったことを意味している。なぜならダウィット・ダンジェは1825年5月上旬にイギリスから帰るや早くも革命を準備する陰謀団に参加していたのである。》

と，ある。こうした事情からベルリンギェーリ公使の反対理由の真意はあなたがいつまで公使の職でおれるかわかったものではない。従ってジューリアの将来をゆだねるわけにはいかないというセリフが隠されている。事実，スタンダールの運命はこうした推測通りに展開しそうだった。当時のイタリアにおける政治状況をみると，トリエステにせよトスカナにせよそれらの小国はオーストリアの属国でしかなかったので，スタンダールの信任状は最終的にはメッテルニッヒにまで届く筈であった。ナポレオン失脚後の神聖同盟の実権を把握し指導者となっていたメッテルニッヒはスタンダールがどんな人物かくらいは報告を受けていた筈である。そこで，彼はスタンダールがフランス派遣のトリエステ公使となることを信任しない。それで，モレ首相はスタンダールをヴァチカン領のチヴィタベッキアに止むなく左遷している。しかし，しがない漁村でも一応フランス政府の体面からスタンダールは領事職に就くことができた。けれども，法王庁から派遣されたスパイが彼の言動を絶えず監視している。このスパイの報告からジューリアとスタンダールが結婚失敗後，どのような関係になっていたかを少しばかりたどることができる。1832年7月にベルリンギェーリ公使はトスカナ大公より休暇を得てジューリアを連れて故国に帰り，彼女を正式の養女とするために骨折り10月12日に彼女は一応正式の養女となっている。その後，翌年の10月までベルリンギェーリとジューリアはイタリアで休暇を送っている。それで，スパイの報告書によると，スタンダールの方は1832年の11月7日に任地からシェンナを訪

れ毎晩のようにベルリンギェーリ父娘を訪問しては晩餐を共にしたり，ジューリアと一緒に彼女の本家リニエリ邸をも訪ねている。そして，19日から一週間フイレンツェに滞在して28日にシェンナへ戻り，郊外にあるベルリンギェーリの別荘で12月1日まで逗留してから任地へ帰っている。しかし，ジューリアの脚線の嫋娜を忘れかねてか六週間後に二回目のシェンナ訪問を試みている。さらに三回目を同年の5月から6月にかけてシェンナではなくトスカナで果している。ジューリアがそこに逗留していたからである。スパイのこうした報告書から推察すると両人はやはり三年前のパリの夜を幾度となく持ったのであろう。次からはスパイの報告に頼る必要はない。スタンダール当人の手紙があるからである。というのもジューリアがトスカナに滞在していた頃から第三者が二人の前に姿を見せようとしていたのである。両人が密会していた前後，彼女は従兄にあたるジューリオ・マルチニとも彼に内諸で会っていたのである。それで，スタンダールは晴天霹靂の目にあう。それは彼女が1833年4月1日付の彼に宛てた手紙で〈私は近々従兄のジューリオと結婚する。〉と，知らせたからである。ジューリアのこの手紙は4月20日になってやっと返事をスタンダールから受けたのである。スタンダールはたかまる怒りを辛じて抑えながらどうにか次の如き手紙を書くことができた。

《私のなつかしい天使，4月1日付，ピエトラ・サンタからのお手紙を拝見しました。どうもお手紙が少なすぎます。それではこれからは単なるお友だちということにしましょう。お友だちという立場になればもうなんの意味もなくなったお手紙はお返し致します。私の心を慰めると思って色々の点で詳しく話して下さい。第一にベルリンギェーリ氏がソフィ（ジューリアの愛称）の御機嫌を取っていた時，氏の幸福はどの程度までいったのですか，ソフィがゲレッピ候（ジューリアの結婚相手ジューリオ・マルチニ）に想いを寄せ始めたのにベルリンギェーリ氏は気づいたのですか，あなたが始めてこの候爵に会ったのはいつなのですか，毎日，あなたの所へ来るのですか，そして，何時に来るのですか，生れは何処なのですか，どうしてあなたは不仕

合せになるでしょうなどとおっしゃるのですか，不仕合せとはたゞ退屈な生活を送るだけです。これはあなたの気を害する意図で申すのではありませんが（なぜなら私があなたをどれほど想っているかは御存知の通りです。）どうもこゝ二年来のあなたの生活は退屈な時が多いのではないかと思われます。どんなに考えてみてもそれは35才の女の方の生活です。ところがあなたはこの分別盛りの年配になるまでにはまだまだ随分楽しい年月があるのでは御座居ませんか，だが，あなたにはヴィニヤノの住人の如き夫が必要なのです。（ベルリンギェーリはヴィニヤノに別荘を所有していた。）ジューリア，要するに色々詳しく知らせて下さい。私の方は悲しみを粉らわそうと例のポリーヌ嬢の手合を相手にして居ます。しかし，ソフィの美しい脚を見た私には彼女はソフィと比較すると月とスッポンです。……心配なのはあなたがお便りを余り下さらないことです。私が口の堅い人間であることは御存知の筈。どうか一切包み隠さず話して下さい。このあいだの訪問はヴィニヤの訪問の時ほど愉快ではなかったようですね。と申しますのはヴィニヤノではあなたは一切包み隠さずフラと結婚する考えのことまで打ち明けて下さいましたのに。（フラとはベルリンギェーリ氏のことでマルタン騎士団の団員であるからそう呼んでいる。）二回目の訪問の際には，あなたがベルリンギェーリ氏と喧嘩なさったことに就いてはなかばお隠しになさいましたね。しかし，恋愛の場合でも友情の場合でもどちらか一方に警戒心と申して悪ければ，遠慮がでてきますと，忽ち，他方は多少とも内気で神経の繊細な人なら，なかば麻痺してしまうものです。》

ジューリアに執ってはどうぞ勝手に麻痺遊ばせという心境であったであろう。私にはジューリオがいるのですもの。それで，スタンダールが慌てゝトスカナに赴むいたことは先述した通りである。そして，6月4日にジューリアはスタンダールの忠告にも耳をかたむけないでジューリオと結婚式を挙げてしまった。ジューリアが結婚したばかりの頃はさすがにスタンダールも気兼ねしたとみえて約一年ほどは彼女の前に姿を見せていないようである。け

れども，翌年の5月4日，スタンダールがゴーティエ夫人に宛てた手紙から推察すると彼はジューリアと逢引した様子が認められるように思われるのである。それ以後の数年は両人がどのような交渉を持ったのかさだかでない。たゞ1835年の2月8日にスタンダールが書いた15通目の遺書でわれわれはジューリアの名を認める。それには愛するクレマンチーヌとジューリアにそれぞれ自著，及び，版画レダの水浴を送ると読めてジューリアを偲んでいる。それで，1835年36年，37年と直接彼女に会った形跡は確かめられないが，1836年の3月12日，彼はパリを出発してイタリアに向う直前，私はジューリアにのみ愛情を覚えていると告白し，次いで，同年の6月8日に今度は30通目の遺書でジューリアにのみルソーの特製本を送るとしたゝめている。脇道へそれることになるが，1835年2月8日に15通目の遺書，そして，1836年6月8日に30通目の遺書，僅か一年有余のあいだにスタンダールは14回も遺言を書いたことになる。確かに異常なことと言わざるを得ない。自己の生命のふっと絶えるような危機をその期間に予感し続けた無神論者の姿をそこにわれわれは認めるものであるが，多分，彼はそうすることで生命の確認を遠近法で持って計っていたにちがいあるまい。そうした精神状態にあるスタンダールが1837年に別の遺書の形式，すならち，自伝『アンリ・ブリュラールの生涯』を書き始めたとしても不思議ではない。

1837年にベルリンギェーリ氏は遂にパリで客死してしまったが，公使が亡くなったことからスタンダールがジューリアと縒をもどす機会が到来した。翌年，55才になった彼は彼女との関係を8月から9月にかけて復活している。というのもかっての恋人クレマンチーヌに今もあなたを愛していると告白して縒をもどそうとしたけれども，彼女に消えてしまった灰は二度と燃えませんわ。と，至極あっさりと拒絶されてしまった。それで，ジューリアだけが彼の意を迎えてくれるたゞ一人の女性となっていた。1837年を迎えた新年早々パリに滞在していた彼は長いあいだジューリアと逢うことはなかった。スタンダールは自身の気持を観察して長期の不在がジューリアに与える心理効果を計算していた。前回にジューリアと密会して以来 140日も彼女の前に現

われず8月3日になってやっとジューリアを訪ねた。次いで，9月16日にも彼女の前に姿を見せていたのであるが9月21日にスタンダールは遂に女盛りのジューリアの肉体を求めた。彼の挑戦に彼女は応じたと言われるがその真実はどうであったのか，われわれの知るところではない。

此の9月3日，スタンダールは『パルムの僧院』をファルネーゼ家の古記録から着想して11月4日から12月26日までに書きあげている。原稿は年末にはロマン・コロンに渡されている。ジューリアと彼の1830年の愛があの情熱の女性マチルドを作家スタンダールに創作させたが，あの頃から7年たった今度もまた彼女はヒロインのモデルとなるだろう。此の問題に就いてアンリ・マルチノはこう指摘している。小説であのクレリアがファブリスの衝動を無意識になんら抵抗することなく受け入れる描写をスタンダールはジューリアとの過去の愛を追想しながら書いたのであろうと，そして，あのサンセビリナ公爵夫人をかっての彼の恋人アンヂェラをモデルとしていると看做しているが，後者にもやはりジューリアの面影が投影されているのが眺められる。読者が夫人の身分設定に注目するとき夫人は明らかにジューリアの社会的地位を占めていると言えるであろう。実像から二人の作中人物を創作するスタンダールの小説作法を注目してみる必要があろう。さて，現実の二人に話をもどしてみるとスタンダールは1839年の6月24日にパリを発って任地に帰っている。その年の秋，珍らしく彼の友がイタリアにやって来ることになった。メリメである。メリメは10月21日にナポリまで来ていたので，スタンダールは彼女に会うためナポリに赴き同地に約20日間もこの友と一緒に滞在していた。毎夜，パリの出来事とか知人たちの噂話をつまみにしてワインで乾杯を重ねたことであろう。また，それとも，過ぎし日，例のアヅール夫人を張りあい，お互に不愉快な思いをしたことでも話題にして苦笑しあったであろうか。

1840年になるとスタンダールは日常の無聊からのがれて狩猟を楽しむと同時にメリメの本職を奪い始める。彼もモスカ伯やファブリスのように発掘の

趣味を持ったのである。あるいはメリメに依頼されていたと見た方が確かだが，ともあれ，スタンダールはセルヴェリ附近を発掘している。その頃，ポルタ・デル・ポポロ美術展に彼の肖像が出品されたと言われているが，当人はどんな気持であったろうか。彼は1月から5月まで『ラミエル』を執筆していたのであるけれども，3月29日にはこのところ遺言を書かなくなっていた彼を死神はもう少しで地獄に誘うところであった。しかし，病気も癒えて元気になると5月18日に7月の招待をジューリアに無心している。彼女が許すと，フィレンツェでの逢引にあのモスカ伯の如く若者の特権とばかり思っていた情熱がたぎるのを覚えて驚いたことであろう。さらに，その頃，スタンダール研究者にもその戸籍が知られていないアーラインなる女性からも愛されている気がして31通目以来すっかり遺言を書くこともしていない。このアーラインなる女性は多分チーニ伯爵夫人であろうと言われている。というのはアールが英語で伯爵を意味し，語尾が女性形であるところからアーラインは伯爵夫人のことであることは確かであろう。すると1839年頃，スタンダールが交際している伯爵夫人は誰かということになればチーニ伯の夫人しか居ない。彼は伯爵夫妻とは数年前から親しくなっていたのである。すなわち，1834年のことで彼はよくチーニ邸で晩餐にあずかっており，その年の8月には一週間もチーニ邸に逗留さえしているが，すでにその頃，スタンダールは夫人に恋心を覚えていたようである。翌年の初春はチーニ邸のサロンで夜遅くまですごすのが彼の日課となっていた。4月になると彼はチーニ夫人と一緒にサン・ピエトロやコルソに出かけている。1836年と1837年には彼女と親しくしていた形跡はなくゴーチェ夫人やクレマンチーヌに求愛して失敗している。

さて，1840年に話を戻すと彼は7月が待遠しくてならない。ジューリアとの密会を指おり数えた筈だ。そして，6月30日にフィレンツエに到着している。7月20日に彼女の許より帰って来た彼は24日に彼女に手紙を投函している。スタンダールは7月26日に『パルムの僧院』を読みながらクレリアがフ

ァブリスに貞操をゆだねる場面に目をとめて，ジューリアが自分に処女を捧げたあのパリの夜を回想していたという。任地チヴィタ・ヴェッキアへ帰ってみたものの彼はジューリアの肉体を忘れかねてか9月4日，5日とフィレンツエに逗留して彼女との逢引を重ねたらしい。

此の年，スタンダールは小説家として生涯最初にして最後の喜びを体験することとなった。バルザックが『パリ評論』の9月25日号で『パルムの僧院』を激賞する筆をとったからである。もっともバルザックはスタンダールの作家活動を好意的に眺めていた節がある。例えば『赤と黒』が出版された翌年の1月10日に，バルザックは『ル・ヴォルール』誌に〈1830年文学史は『結婚の生理』に始まり『赤と黒』で終る〉と書いていた。ともあれ，バルザックの文章を読んだスタンダールはたいへん感激して10月16日から感謝で満ちた手紙をあれこれ三通も書きかえて，やっと30日になってバルザック宛に投函することができた。

明けて1841年，此の年は彼に執って何ごとも死の影がつき纏う月日となった。1月2月とアーラインなる女性を求めた後の3月15日に脳溢血の発作が彼を襲った。その後遺症ともいうべき失語症の兆が現われてくる。4月10日，彼は死を予感してか友に〈街頭で即死する方がいゝ。〉と，手紙に漏している。7月20日頃，フランスから珍客が彼を訪問している。ブーショ夫人である。イタリア案内のかたわら彼は彼女に愛を覚え始めた。8月2日は暑さの厳しい日であり，猛暑に刺激されてか彼は夫人を征服している。続いて10日にも彼は夫人に挑戦している。しかもその直後，この勝利に励まされてか8月13日の夜フィレンツエに到着し，例のホテルでこれが今生の別れともなるとは知らずジューリアとの密会を持った。そして，秋風と共にパリへ病気治療の許下を得て帰っている。翌年にはスタンダールが死を迎えるがジューリアは同じ年の3月に養父の遺産相続争いに勝ち，終生の望みを手中にしたが，その月の23日に終生の愛人を失った。スタンダールは彼自身の望み通りパリの街頭で倒れたのである。

最後にこの伝記を書く際に以下の文献を参考にしたり，引用したことを断っておきたい。

(1) Léon Blum : Stendhal et le Beylisme, Ed. Albin Michel。
(2) Claude Roy : Stendhel par lui-même Ed. Ecrivains de Toujours。
(3) Armand Caraccio : Variétés Stendhaliennes Ed. Arthaud。
(4) Henri Martineau : Le Cœur de Stendhal Ed. Albin Michel。
(5) F・M・Albérès : Le Naturel chez Stendhal Ed. Nizet。
(6) Aragon : La Lumière de Stendhal Ed. Denoël。
(7) André le Breton : Le Rouge et le Noir de Stendhal, Ed. Mellottée。
(8) Jean Prévost : La Créatin chez Stendhal, Ed. Mercvre de France。
(9) Henri Martinean : L' œuvre de Stendhal Ed. Albin Michel。
(10) Paul Arbelet : La Jeunesse de Stendhal, Ed. Champion。
(11) Albert Thibaudet : Stendhal, Ed. Hachette。
(12) Henri Dumolard : Pages Stendhaliennes, Ed. J. Rey de Grenoble B. Arthand successeur 1928。
(13) Georges Blin : Stendhal et Les Problèmes du Roman, Ed. Librairie José Corti。
(14) V. Del Litto : La Vie intellectuelle de Stendhal, Ed. Presses univesitaires de France。
(15) Balzac : Études sur M. Beyle, Analyse de La Chartreuse de Parme, Ed. D' Art Albert Skira。
(16) Jean-Paul Weber : Stendhal, Les Structures thématiques de l'oeuvre et du destin. Société d'édition d' Enseignement supérieur。
(17) H.-F. Imbert : Les Métamorphoses de la Liberté ou Stendhal devant la Restauration et le Risorgimento, Ed. Librairie José Corti。
(18) 片岡美智：『スタンダールの人間像』白水社。
(19) 小林正：『スタンダールとその恋人たち』今日社。
(20) ツヴァイク：『スタンダール』青柳瑞穂訳，新潮社。
(21) 九鬼周造：『現代フランス哲学講義』岩波書店。
(22) 松平齊光：『フランス啓蒙思想の研究』有斐閣。
(23) E. カッシーラー：『啓蒙主義の哲学』中野好之訳，紀伊国屋書店。
(24) アンドレ・モロワ：『フランス史』平岡・中村・山上訳，新潮社。
(25) 世界歴史事典，平凡社。